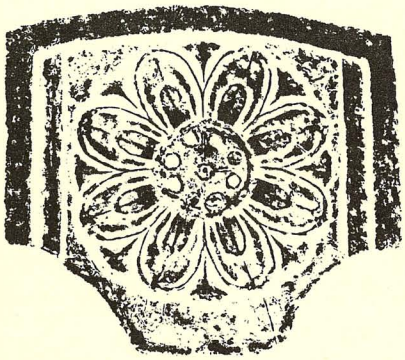
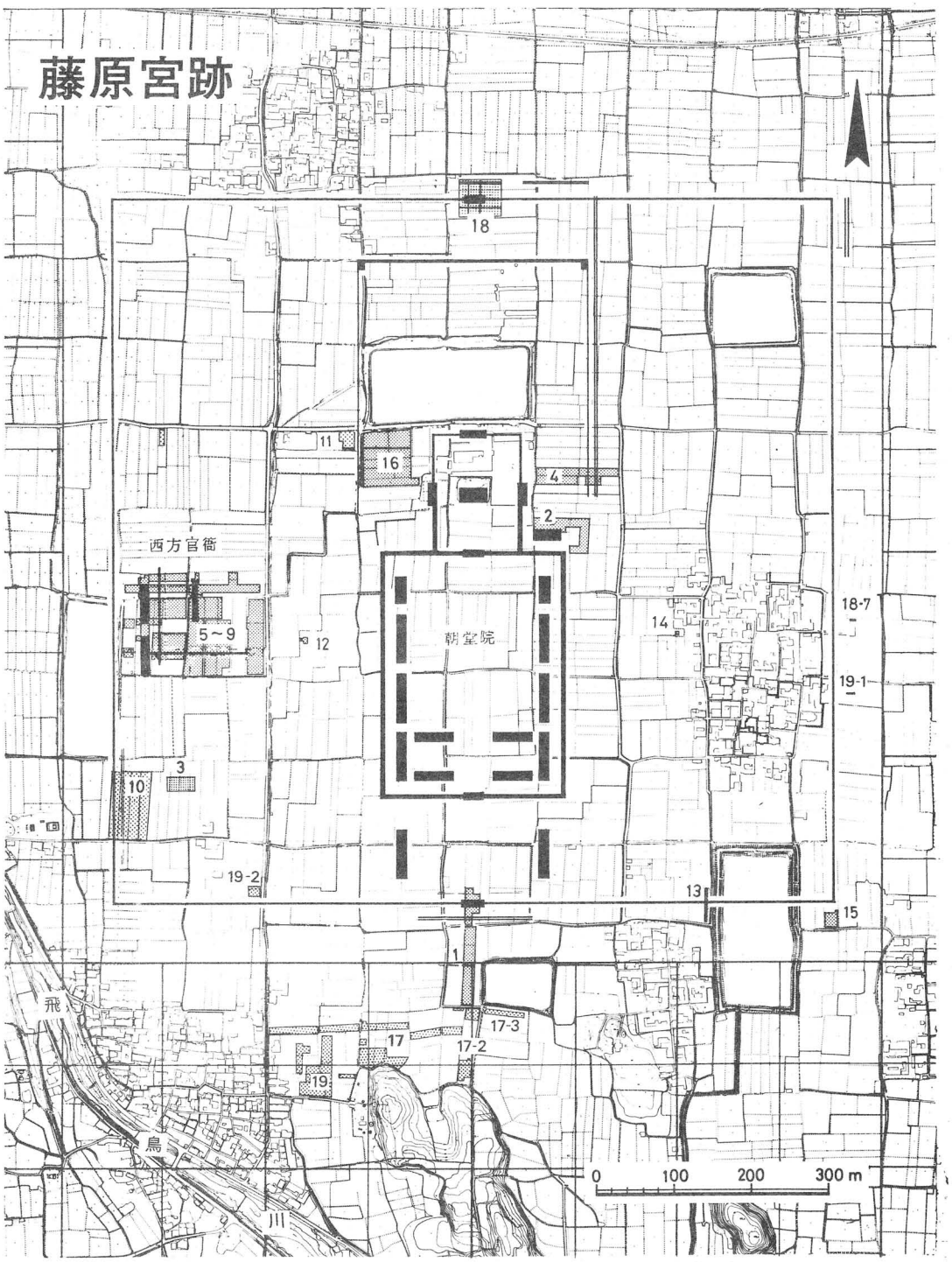
飛鳥・藤原宮発掘調査概報 7



昭和 52 年 5 月

奈良国立文化財研究所


藤原宮跡
18
11
16
4
2
西方官衙
5～9
12
朝堂院
14
18-7
19-1
3
10
19-2
13
15
1
飛
17-3
17
17-2
19
鳥
川
0
100
200
300 m

網:調査地　数字:調査次数

飛鳥・藤原宮発掘調査概報　7

目　　次

藤原宮第17－2・3次の調査 …… 3
藤原宮第19次の調査 …… 7
藤原宮第19－1次の調査 …… 17
藤原宮第19－2次の調査 …… 18
山田寺第1次の調査 …… 20
大官大寺第3次の調査 …… 36
稲淵川西遺跡の調査 …… 43
奥山久米寺西方の調査 …… 50
小墾田宮推定地第3次の調査 …… 51
軽池北遺跡の調査 …… 52

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部は，昭和51年度の調査として，藤原宮・山田寺・大官大寺・稲淵川西遺跡・奥山久米寺西方・軽池北遺跡等の発掘を実施した。

藤原宮では第19次までの調査を終了し，現在第20次調査として大極殿院北門を調査中である。特に，今年度は藤原京朱雀大路及び右京7条1坊を調査し，従来不明であった京内の様相の一端を知ることができた。

山田寺は，史跡整備のための初年度の調査を塔・中門・回廊の確認を目的として実施し，ほぼ当初の目的を達することができた。

大官大寺では東面回廊及び寺域の東限を確認する目的で第3次調査を実施し，回廊を確認するとともに，中ツ道跡と推定される道路遺構を検出した。

稲淵川西遺跡は駐車場建設に伴う事前調査として実施し，掘立柱建物や石敷広場など，7世紀中頃に造営された宮殿跡と考えられる遺構を検出した。

小墾田宮推定地や藤原宮内のその他の調査は，いずれも家屋の新築等に伴う緊急調査として小範囲の発掘を行ったものである。

飛鳥・藤原宮発掘調査地区一覧表

遺跡調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地籍地番	所有者	備考
藤原宮17－2・3※	6AJH	9.0 a	51. 4. 5～51. 5.18 51.10.12～51.11. 6	橿原市上飛弾町49 51－1	橿原市	（朱雀大路） 市営住宅建設
19※	6AJH	26.0 a	51.11. 9～52. 2.12	橿原市上飛弾町 63－2～72－4	橿原市	（右京7条1坊） 宅地造成
19－1※	6AJC	0.2 a	51. 5.25	橿原市高殿町 字夕貝114	中尾佐市	家屋新築
19－2※	6AJH	2.0 a	51.10.22～52.11. 6	橿原市飛弾町84・86	橿原市	農業用倉庫
19－3	6AJE	0.1 a	51. 8.26	橿原市醍醐町境 ケフケ95－3、96－3	福田長太郎	家屋増築
19－4	6AJF	0.2 a	52. 1.10～52. 1.11	橿原市縄手町 戊亥垣内168－1	浅田　昭雄	作業場新築
19－5	6AJG	0.2 a	52. 1.13	橿原市高殿町 185－2	伊藤　源男	家屋増築
山田寺※	5BYD	27.0 a	51. 4.27～51.12.18	桜井市大字山田 堂ノ前、塔ノ段	国	塔・中門・回廊の確認
大官大寺※	6BTK	17.0 a	51. 4.22～52. 1.21	明日香村大字小山 塔ノ井3、4、5 中ノ坪12	山尾　和男 中谷　長治 谷口　悦子 西井　正	東回廊・寺域東限の確認
稲淵川西遺跡※	5AIB	7.2 a	51.12. 7～52. 3.15	明日香村大字稲淵 字菖蒲池25、26	明日香村観光開発公社	駐車場建設
軽池北遺跡※	6AMU	11.0 a	51. 5.13～51. 6.23	橿原市大軽町 かないけ283 石川町南口499 五条野町さがなか 305	橿原市	市立畝傍東小学校建設
奥山久米寺西方※	5BOQ	0.7 a	51. 8.23～51. 9.16	明日香村奥山 210－1	出口　潔	家屋新築
小墾田宮推定地※	5AOH	0.4 a	51. 9.17～51.10. 4	明日香村豊浦18－1	島原　義治	家屋新築

※　本概報に収録

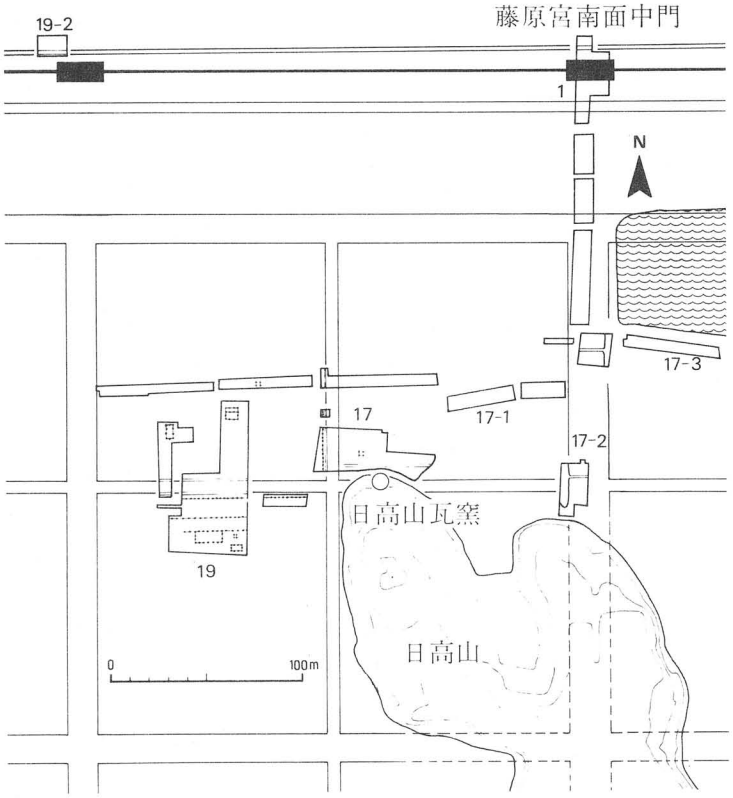
藤原宮第17－２・３次の調査

（藤原京朱雀大路）

（昭和51年４月～昭和51年５月・昭和51年10月～昭和51年11月）

この調査は，藤原宮の南約200ｍに位置する日高山地区の橿原市市営住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。今回の調査地の西に接する地域，すなわち藤原京右京７条１坊の一画は，既にその一部を藤原宮第17次調査として発掘しており，条坊に関連すると見られる塀・溝等を検出している「概報６」参照。　さらに今年度は，藤原宮第19次調査として右京７条１坊の３坪と４坪を発掘し，７条条間小路と多数の掘立柱建物等を検出している（本概報収録）。

今回の調査地の藤原京における位置は，第１次調査で検出した南面中門の南150～200ｍにあたり，平城京の朱雀大路に相当する位置を占める。藤原京の場合も，この位置には以前から京の中央南北道路遺構の存在が想定されており，また調査地の南半地区は，この中央南北道路と，東西に走る７条条間小路が交叉することが予想される位置にもあたる。調査は日高山北裾の南地区と，そこから北へ50ｍ離れた北地区の２ヵ所で４月～５月まで実施し，その後10月～11月に北調査地区の東地区を調査した。



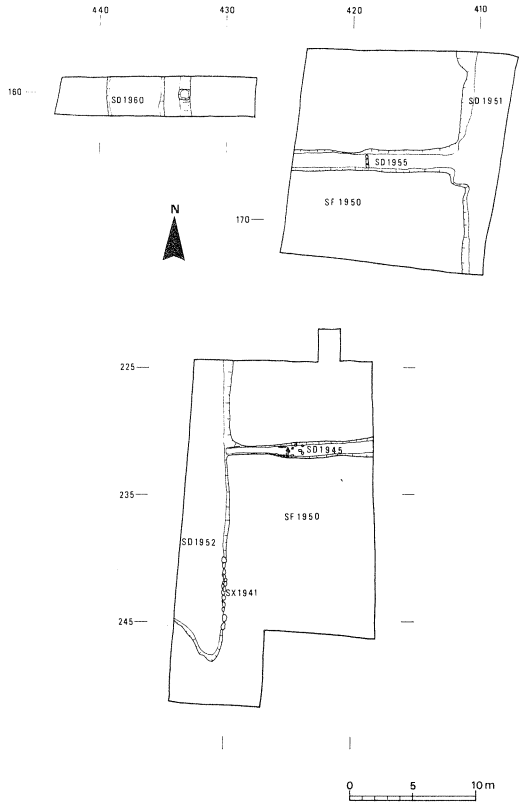
第17－２・３次調査周辺図（縮尺4000分の１）

〔遺構〕　調査の結果，南地区と北地区で南北大溝と東西溝を検

出した。なお東地区では藤原宮期の遺構は検出されなかった。

南地区の南北大溝 SD1952 は幅 4 m以上，深さ0.4mを測り，長さ24mを検出した。南端は日高山の北裾で終っている。西岸は調査地外にあるため不明であるが，東岸は0.3m大の玉石を積み護岸している。玉石積みは現状で 2 段あり，検出した溝の南端から北へ 6 mにわたって残っている。玉石積みは上端がそろっていないので，もとは 3 段以上積んでいたものと考えられる。溝の堆積土からは，7 世紀末から 8 世紀初頭にあたる藤原宮期の遺構から出土するものと同じ特徴をもつ土師器・須恵器および丸・平瓦の破片が少量出土した。この溝はその後，短期間に埋没しており，それ以降の遺物を含まない。

東西溝 SD1945 は，幅1.4m，深さ0.6mを測り，SD1952 の東岸から東へ 6 m の位置に玉石組の施設が残っている。この東西溝 SD1945 は，当初第17次調査で検出した東西溝 SD1845 の東延長部と考えられたが，藤原京の条坊との関連で考えると溝の東西の振れが大きくなりすぎ，同一の溝とするには問題が残る。今後の検討が必要である。



第17－2・3次調査遺構実測図

北地区の南北大溝 SD1951 は素掘りの溝で西岸のみを検出した。幅 4 m以上，深さ0.4m，長さ18mにわたって調査した。溝の堆積土からは SD1952から出土したものと同じ特徴をもつ土師器・須恵器・瓦類が出土した。

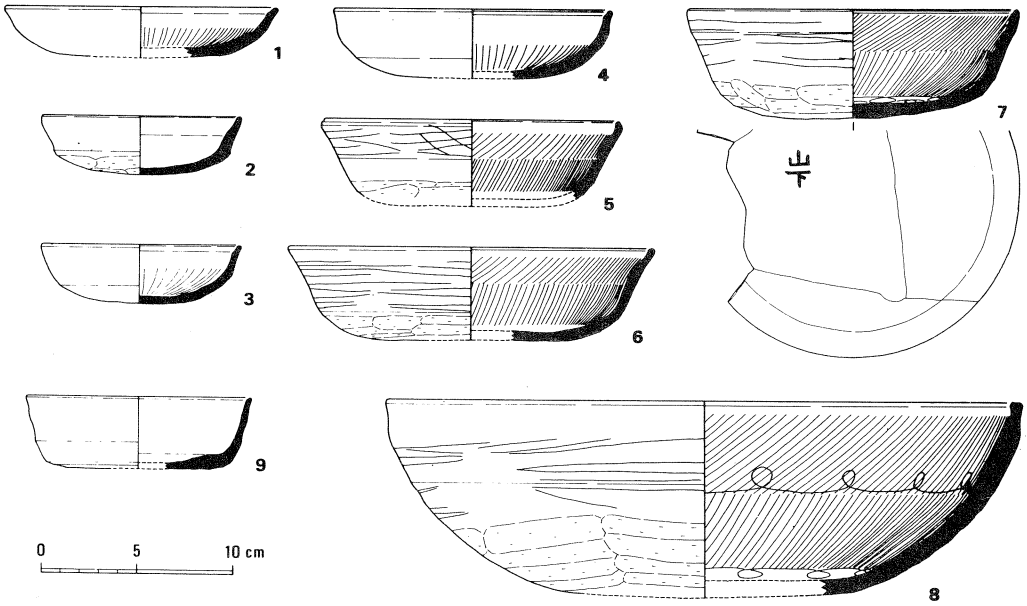
東西溝 SD1955 は幅1.5m，深さ 0.45 m を測り，長さ13mを検出した。この溝は SD1952 の西岸から西へ 7 m の位置に建築部材を転用加工した木堰を設けており，その木堰の東では木杭に小枝をからませたしがらみによる護岸施設がみられる。

なお，北地区の西10mにトレンチを設けた。このトレンチでは浅い素掘りの溝SD1960を検出した。SD1960はSD1952の延長と考えるには振れが大きくなりすぎ，異なる溝と考えられる。この西トレンチ一帯は後世の流路による削平が著しく，SD1952の延長にあたる溝は検出できなかった。

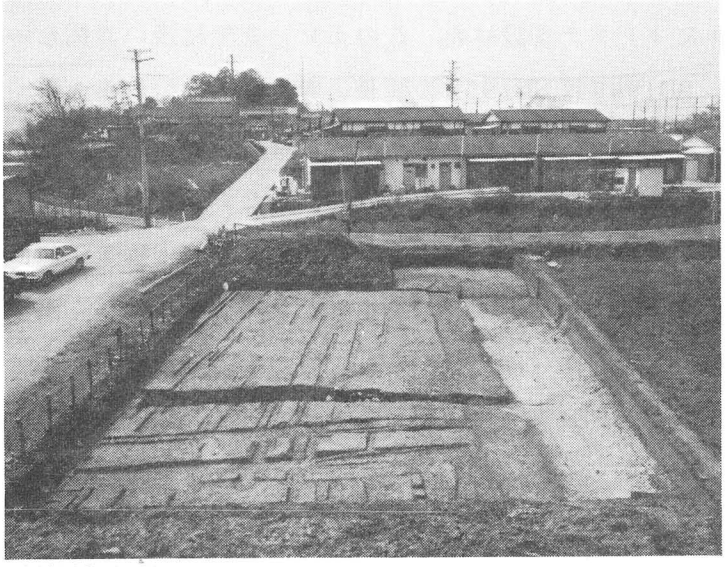
〔**遺物**〕　整理箱にして2箱程度の遺物が出土した。大部分が土器で，他に少量の瓦と木片がある。土器は土師器と須恵器を主とし，調査区全体から出土したが，南北大溝SD1951・1952からは比較的まとまったものが出土したので以下に図示する。（2）のみがSD1952，他はすべてSD1951からまとまって出土した。

土師器には杯A・CおよびHと盤があり，須恵器はいずれも小片で，図示できるものは杯A（9）のみである。また，底部外面の中央よりやや片寄って，「山下」と書いた墨書土器が1点ある。

〔**まとめ**〕　南地区の南北大溝SD1952と北地区のSD1951は，位置や出土遺物から同時期に平行して流れていたと考えられる。この平行する2本の南北大溝にはさまれた空白地は，藤原京の中央南北道路（以下平城京の朱雀大路にあたるところから，藤原京の朱雀大路と仮称する）に相当することから，この



第17－2・3次調査出土土器実測図　1・3～9；SD 1951，2；SD 1952


南地区全景（北から）

２本の大溝は，朱雀大路の両側溝とみなされる。この朱雀大路の路面幅は約19m，両側溝の心々距離は東側溝の東岸が現在の道路下におよんでおり検出しえていないので明らかでないが，東西とも同規模のもので溝幅５mと想定すると約24mほどに復原できる。この結果からみると，藤原京の朱雀大路幅員は第18次調査で検出した朱雀大路計画線と仮称した大路や，本薬師寺西南隅，すなわち８条大路と西３坊大路の幅員側溝心々距離16mよりも広く，宮南の中央大路としての性格の一端をうかがうことができる。

この側溝は，日高山の北裾に突きあたる位置で終っている。これは日高山の山腹まで側溝がのびていたものが後世削平されて失なわれてしまったのか，朱雀大路の側溝を掘削した当初からこの位置で止まっていたのかは明らかでない。しかし西側溝東岸の玉石積みが，検出した溝の南端から北へ６mのみ遺存していたのは，日高山の山裾にあたる位置にのみ，とくに玉石による護岸を施していたことを想定させる。

なお東西溝SD1945に遺存していた石組施設は，この溝が暗渠となっていたことを示すものとみられ，東側溝SD1951と西側溝SD1952とを結んで排水するためのものであろう。SD1955は溝の堆積層から出土した遺物からみると南北大溝SD1951よりやや古い時期のものとみられる。この溝は現在想定できる条坊とは無関係の位置にあるが，南北大溝SD1951に直交することから，この二つの溝がそれぞれ独立した溝とは考えにくい。なんらかの地割に関係した溝であった可能性が強い。

藤原宮第19次の調査

（藤原京右京７条１坊）

（昭和51年11月～昭和52年２月）

この調査は，橿原市が上飛弾町に計画した宅地造成に伴う事前調査である。調査地は藤原宮南面中門から南西に300ｍ，朱雀大路および日高山の西方，第17次調査区の南西に位置する水田で，藤原京右京７条１坊の推定地にあたる（３頁の地形図参照）。なお，調査面積は2,600㎡である。

藤原京条坊の坪割については，最近の発掘調査の成果から，東西・南北とも各１条の小路によって４つの坪に分けていることが明らかになっており，後述するように今回の調査でも７条条間小路にあたる道路を検出した。しかし，現在のところ藤原京における坊内の坪についてはその呼称が明らかでないため※ここでは仮に平城京の坪と同じ順序で呼ぶことにする。この呼称に従えば，今回の調査区は藤原京右京７条１坊３坪と４坪にあたる。なお方位は国土調査法による第６座標系の方眼北（N6′48″72W）を使用した。

各遺構は同一遺構面で検出したが，遺構の切り合いや出土遺物から，藤原宮造営前，藤原宮期，中世以降の３時期に大きく分けることができる。このうち中世以降の遺構は，東西および南北方向の細溝以外に顕著なものはないので，ここでは省略し，藤原宮造営前の遺構をＡ期，藤原宮期の遺構をＢ期とし，両期の遺構について述べる。

Ａ・Ｂ期の主な遺構は掘立柱建物13，道路１，掘立柱塀６，溝３，土壙20である。（第２表参照）

〔**Ａ期の遺構**〕　掘立柱建物７，溝１，掘立柱塀１と自然の流路SD1861・1870がある。建物の振れをみると，北で東に振れるものと，北で西に振れるものがある。藤原宮第16次調査の結果によると，藤原宮造営前の建物は，北で東に振れるものが古く，北で西に振れるものが新しい傾向を示すことが指適できる「概報６」参照。ここでは，前者をA_1期，後者をA_2期とする。

A_1期の遺構には掘立柱建物２がある。SB1971は南北棟の総柱の建物である

が，西側柱列と棟通りの柱筋は不揃いである。南と北の妻および北妻から3番目の柱穴は，径10～15㎝の玉石を5～6個用いて根固めをしている。SB1996は1間×1間の東西棟で，直径10㎝の柱痕跡をもつ小規模な建物である。

A_2期の遺構には掘立柱建物5，掘立柱塀1，溝1がある。SB2026は桁行5間・11.6m，梁行2間・5mを測り，この時期では最大規模の建物である。この建物は柱をたてるにあたって，柱掘形の底をさらに一段掘り凹め，その部分に45×30㎝前後，厚さ15㎝前後の平らな石を据え，石の上に柱をたてている。SB2010はSB2026の南で検出した。南妻の柱穴は明らかでない。SB2009は東西棟で東妻柱列のみ検出した。東南隅柱には柱根が残る。SB2008はSB2009と重複する建物であるが，棟の方向，規模およびSB2009との先後関係は不明である。SB1995はA_1期のSB1996と重複するほぼ同規模の建物である。

東西溝SD2033は調査区中央付近で検出した。幅0.45～0.6m，深さ0.2～0.45m，長さ45m以上の素掘りの溝で断面形はU字形を呈する。溝には砂を含む灰褐色粘質土が堆積し，東の方で木片および曲物，7世紀後半の土師器片が出土した。掘立柱塀SA2036は調査区の北西部で検出した。付近には同期の遺構はない。

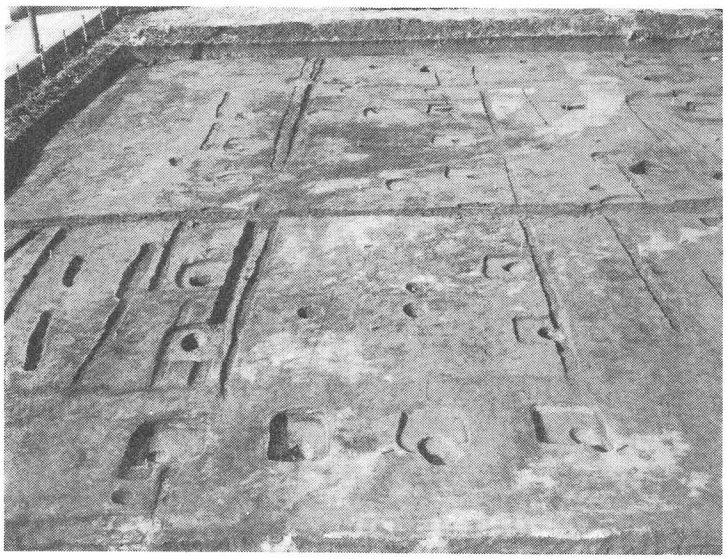
〔**B期の遺溝**〕　掘立柱建物6，道路1，溝2，掘立柱塀5，井戸1，土壙20がある。遺構は道路，藤原京右京7条1坊3坪，4坪のものにわけて記す。

道路SF2031は北側溝SD2032と南側溝SD2030を伴ない，路面幅約6m，溝心々距離約7mを測る。北側溝SD2032は幅1.2m，深さ0.2mの素掘りの溝で，調査区中央付近で浅くなり東半は削平されている。南側溝SD2030は幅0.75～1.45m，深さ0.25m前後の素掘りの溝である。溝には暗灰褐色粘土が堆積し，藤原宮期の墨書土器，木簡，軒平瓦（6643C），木製鋤などが出土した。この道路SF2031は側溝から藤原宮期の遺物が出土したことと7条条間小路の推定位置と一致していることから7条条間小路と考えられる。なお，SF2031は西で南に約2°振れている。

3坪の遺構　SF2031より南の3坪では，坪の北半部を調査した。遺構の重複関係からB_1・B_2の2期にわけることができる。

B_1期ではSF2031の南側溝SD2030の心から3m（10尺）の位置にSF2031と平行する東西の掘立柱塀SA2029を検出した。SA2029は未調査部を含めて28間分・62.5mある。柱間はばらつきがあるが，2.2m前後のものが多い。3坪の遺構は全てSA2029の南に配置されており，SA2029はその位置から，坪の北を画する施設とみてよい。SA2029の東から10番目の柱穴を起点として，南北の掘立柱塀SA1997が南に延びる。2間分4.4mを検出した。SA2029の南9.6mには東西の掘立柱塀SA2020がある。14間分38mを検出した。柱間は3.3m前後である。SA2020の柱穴は西方でSB2025の柱穴と重複しており，SA2020が古い。B期の中では比較的早く廃絶したものと思われる。

B_1期の建物はSA2020の南で検出した。SB2000は北側柱列がSA2020の南7.5mにある東西棟の建物で桁行6間14.4m，梁行3間5.7mを測る。柱間は桁行が2.4m等間，梁行が1.9m等間である。柱掘形も一辺1m前後あり，今回の調査範囲内では最大規模の建物である。柱は全て外側に向って抜き取り，柱抜き取り穴の埋土は雲母を多量に含む灰褐色土である。SB2000を東西に二分する中軸線は，ほかの条坊遺構から推定される3坪の中軸線とほぼ一致する。SB2000の北側柱列の東と西には東西の掘立柱塀SA1975とSA2005がとりつく。SA1975は4間分・9.8mを検出した。SA2005は2間分4.8mを検出した。SA2005はさらに西に延びる可能性もある。SA1975・2005ともSB2000にとりつく部分の柱間を狭くとっており，実際にその間を閉じていたかどうかは不明である。


SB2000（東から）

SB2000の南東部には東西棟SB1970がある。南側柱列は柱痕跡

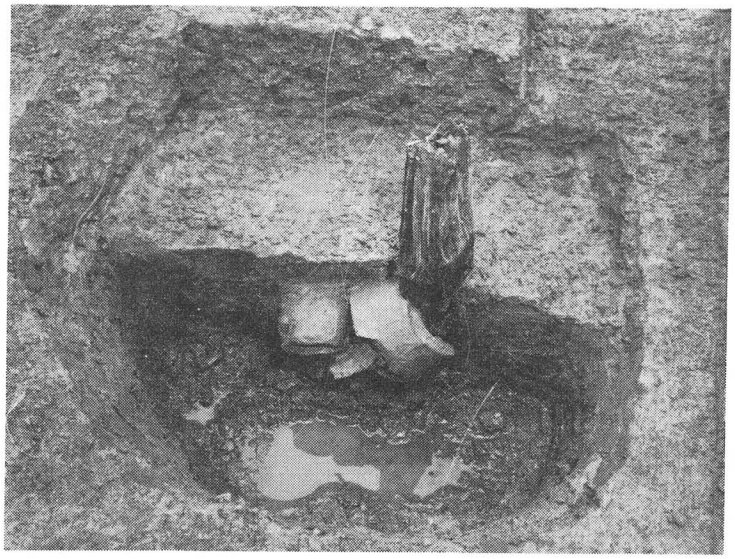
を残し，桁行柱間1.8m等間，梁行柱間1.65mである。SB2000，SA1975，SB1970に囲まれた部分に井戸SE1973がある。掘形の平面形は径2.2mの円形を呈し，深さ1.6mを測る。井戸枠は抜かれていたが，井戸底で，井戸枠を据えたと思われる96×80cm，深さ25cmの楕円形に掘り凹めた部分を検出した。井戸からは藤原宮期の土師器と木片が少量出土した。

3坪の東にはSB1994がある。南北棟で北の妻柱列を検出した。梁行2間，1.5m等間である。

B期の土壙のうち大部分はSB2000の北方に掘られている。SK2015からは塼仏の笵が出土した。SK1980は小鍛治の炉壁と思われる熔融物が出土したが，壁面は焼けていない。このほかに顕著な遺物を出土した土壙はないが，SK1980のように焼土，灰を多く含む土が堆積するものが多い。

B_2期の遺構にはSB2025，SX1972がある。SB2025は総柱の建物で，SA2020が廃絶した後に建てられている。柱間は桁行1.7m等間，梁行1.5m等間である。SX1972はSB1970と重複する。東西1間，柱間1.8mを測るが，その性格は不明である。

B_1期からB_2期まで存続する遺構としては坪の北を画する塀SA2029のほかは明らかでない。SB2000の柱抜取穴の埋土はSA2020の抜取穴と同じものであり，SB2000はSA2020と同時に廃絶した可能性が強い。調査区からは奈良時代に属する遺物は出土しておらず，B_2期も藤原宮期としてよいものと思われる。



SB 2040 北西隅柱穴

4坪の遺構，3坪に比較して遺構は少ない。掘立柱建物2，土壙1を検出した。3坪で坪

の北を画していたSA2029のような施設は4坪の南には設けられていないが，坪の東では17次調査で検出した南北塀SA1855を坪の東を区画する施設とみなすことができる（3頁の図参照）。

4坪の西で検出したSB2035は南北棟で，側柱列の柱間のうち両端を2.3mにとり，中の間は広くとり2.6mとしている。側入りの建物であろう。SB2040は坪の東で検出した東西棟で，北に廂のつく建物である。身舎の柱間が桁行2.3m等間，梁行1.8m等間であるのに対して，廂の出は2.4mを測る広廂の建物である。西妻柱列のうち南西隅の柱穴以外はいずれも柱根が残る。北西隅の柱穴からは根固め石に代用した状態で軒丸瓦6274A型式1点が出土した。

土壙SK2035はSB2040の南東に検出した瓦溜りで，丸・平瓦が出土した。

〔**遺物**〕　木簡，瓦，土器，木製品，塼仏笵などがあるが出土量は少ない。

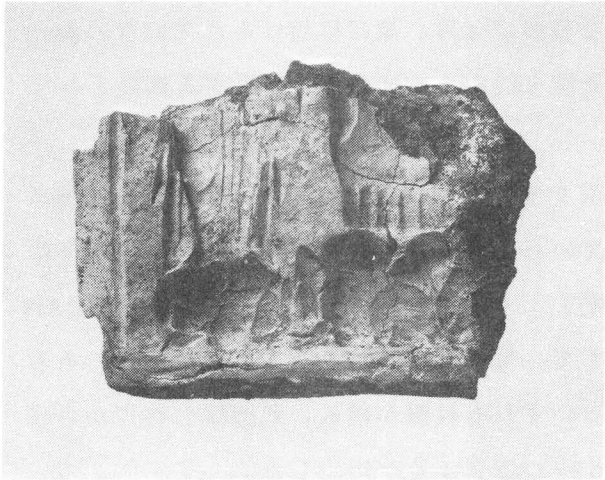
木簡は判読できるものはなく，墨痕の残るもの2点が出土した。

瓦は軒丸瓦・軒平瓦各7点と丸・平瓦がある。軒瓦を型式別にあげると，軒丸瓦では6233A・6275I各1点，6274A4点，不明1点，軒平瓦では6643C・6561各1点，6647C2点，6643A3点となる。このうち6561・6643C・6647Cは調査地の東に隣接する日高山瓦窯の製品のなかには従来みられないものであり，今後の検討を要する。

土器は土師器と須恵器が出土したが，遺構から出土したものは少ない。墨書土器は1点ある。SD2030から出土したもので，藤原宮期の土師器杯Aの底部外面に「米」の墨書がある。

木製品には鋤と曲物がある。鋤は柄の一部を欠くが，現長69cm，刃部最大幅18cm・最大長26cmを測る長柄鋤である。曲物は容器の底板または蓋板で円形を呈する。直径16.5cmを測り，3カ所のとじ孔を残す。

塼仏笵はSK2015から出土した。笵は雄型に粘土を押し焼成したもので，左下半部を残し，現存幅9cm，高さ6.5cmを測る。大小の蓮華座と2体の立像下半身が残る。復原すると，中央に如来立像を配し，左右に脇待菩薩立像をおく形式となる。ただ如来立像の蓮華座が左右対象にならず，蓮弁に傾きがあることから，これを中尊とせず四尊あるいは五尊形式になる可能性もある。この笵か



ＳＫ2015出土塼仏笵

ら製作した塼仏はどの寺で用いられたか現在知られていない。塼仏笵の出土からすると付近に工房址があった可能性もある。

〔**まとめ**〕　今回の調査によって，藤原宮造営前の遺構を明らかにするとともに，藤原京の各坪の実態をつかむ手がかりを得た。

Ａ期とした藤原宮造営前の遺構の年代については，A_2期のSD2033から７世紀後半の土師器が出土しており，A_2期は条坊施行直前の時期とすることができる。A_1期はSB1996が廃絶した後にほぼ同規模のA_2期の建物SB1995が建てられていることから古くとも７世紀後半をそれほど遡らない時期と思われる。A_2期の遺構のうち，SB2009とSB2008が重複していることや建物の振れがSB2006のように方眼北に近いものとそうでないものがあり，A_2期はさらに細分される可能性がある。

藤原宮期の遺構では，右京７条１坊３坪の場合，建物群の性格は明らかでないが，建物は計画的に配置されていたことが明らかになった。すなわち，坪の北を東西塀SA2029で小路と平行に画し，坪を東西に二分する中軸線上に大規模な東西棟建物SB2000を建てる。小規模な建物や井戸は中軸線をはずして配置している。３坪は坪の北半部を調査したのみであるが，坪の中を細分するような施設は検出していない。坪全体を一つの宅地として使用していたものか，あるいは複数の宅地として使用していたものか明らかでないが，前者であれば主屋を坪の中心，SB2000の南方に想定できよう。

坪と道路を画する施設は３坪，４坪とも掘立柱塀である。４坪では坪の東には西１坊坊間小路との間を画する南北塀を設置するが，坪の南を画す施設はない。従って坪と道路との間を画する施設は必ずしも坪の四周に設置されていたものでないことが指摘できる。

7条条間小路については，東接する17次調査区で小路の南側溝位置に一致するとされている東西溝SD1845が検出されている（概報6）。　SD1845を南側溝とすると，藤原宮期の井戸や鋳造炉跡が小路上に作られていたことになる点やSD1845を西へ延長した場合，4坪の東を画する南北塀SA1855によって小路が閉塞されるという矛盾点が指摘されている。小路側溝SD2030・2032を東へ延長した場合，SD1845はいずれの溝とも一致せず大きく北へずれる。従ってSD1845を小路南側溝とするには問題が多い。

今回検出した7条条間小路を東に延長すると延長線上に日高山および日高山瓦窯が位置する。日高山と小路の関係は，①小路は日高山の山裾までしか作られなかった。②日高山の山腹を越えて朱雀大路まで直線的に作られた。③山腹にあたる部分は北に迂回させて朱雀大路に続けたことが考えられる。今回の調査区の東は墓地となっているので，それを明らかにすることは困難である。藤原京の大路や小路が丘陵にあたる場合，それをどう処理しているかが今後の問題として残る。

なお，SF2031の中心座標を坪の中軸線上で示すと下記のようになる。

$$\begin{cases} X = -167{,}238.2\,m \\ Y = -\ \ 17{,}618.4\,m \end{cases}$$

※藤原京の坊・坪の名称を表わすものとして『続日本紀』天武天皇3年正月の条に「林坊」，平城宮朱雀門下層で検出した下ツ道の側溝SD1900出土の過所木簡に「左京小治町」がある（『平城宮木簡2』参照）。

図面の座標

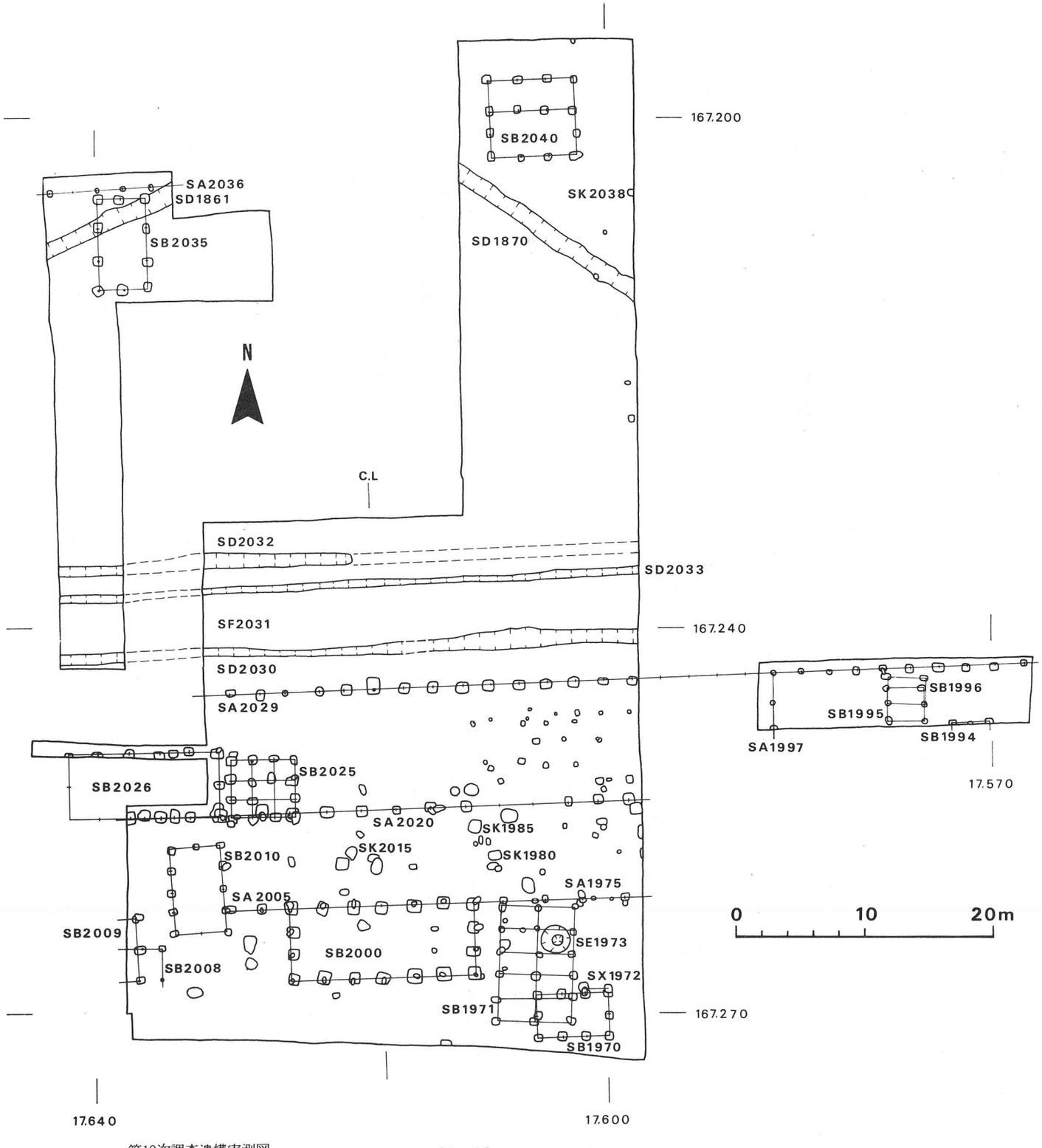
当調査部では，遺跡の実測にあたって，国土調査法による第6座標系（以下国土方眼と略す）を基準としている。本概報の図面に記入してある座標もこれによっている。例えば藤原宮大極殿基壇の東南にあるベンチマークの座標は，

X＝－166,508.84　　Y＝－17,404.92

である。ただし図面ではX，Yおよび－を省略してある。

第19次調査主要遺構一覧表

時　期	遺　　構	規模(柱間・規模、m)	備　　考
A1 期	SB 1971・南北棟	5×2間・9.0×6.0	総柱　SB 1970・SA 1975より古い。
	SB 1996・東西棟	1×1　・　3.0×2.0	SA 2029より古い。
A2 期	SB 1995・東西棟	1×1　・　2.9×2.7	
	SB 2008・　?	?　・　?	
	SB 2009・東西棟	?×2　・　?　×4.8	
	SB 2010・南北棟	4×2　・　6.8×4.0	SA 2005より古い。
	SB 2026・東西棟	5×2　・11.6×5.0	SA 2020より古い。
	SA 2036・東西塀	4　・　8.0	
	SD 2033・東西溝		
B1 期	SF 2031・小　路		7条条間小路。
	SD 2030・東西溝		7条条間小路南側溝。
	SD 2032・東西溝		7条条間小路北側溝。
	SB 1970・東西棟	3×2　・　5.4×3.3	SB 1971より新しい。
	SB 1994・南北棟	?×2　・　?　×3.0	
	SB 2000・東西棟	6×3　・14.4×5.7	
	SA 2029・東西塀	28　・　62.5	
	SA 1975・東西塀	4　・　9.6	SB 2000の東にとりつく。SB 1971より新しい。
	SA 2005・東西塀	2　・　5.9	SB 2000の西にとりつく。
	SA 2020・東西塀	14　・　38.0	SB 2025より古い、SB 2026より新しい。
	SA 1997・南北塀	2　・　4.4	
	SE 1973・井　戸		
	SB 2035・南北棟	3×2　・　7.2×3.8	
	SB 2040・東西棟	3×3　・　6.9×6.0	北に廂。
B2 期	SB 2025・東西棟	3×3　・　5.1×4.5	総柱　SA 2020より新しい。



第19次調査遺構実測図

藤原宮第19－1次の調査

（昭和51年5月）

この調査は，家屋新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は，藤原宮の東外濠SD170の想定位置にあたる。幅1.5m，長さ9mの東西トレンチを設定して調査を行った（表紙裏の地形図参照）。

調査の結果，南北大溝1を検出した。発掘区の土層は，上から耕土・床土があり，溝の両外側の部分は直接灰褐色ないし黄褐色の砂質の地山に至っている。溝は断面逆台形を呈し，溝堆積土の上面で幅5.3m，深さ0.7mを測る。溝の堆積土は数層に分かれ，最下層の暗灰色粘土層から手斧の削り屑を含む多量の木片とともに木簡19点が出土した。釈読可能のものは，習書と思われる次の一点のみである。

表　「□春□　春部己酉部丸部　□人
　　□　□　□□□□□　□□」

裏　「□　□□
　　□□□人人　阿□□（郷カ）
　　□」

出土遺物には，この他に少量の瓦，土師器，須恵器の破片がある。

この調査によって検出された南北溝は，宮東外濠SD170に相当する。既に調査されている宮東北隅における東外濠の心と，今回検出の溝心とを結ぶ線は，国土方眼の北に対して西へ46′30″の振れを持っている。宮南門の中心と北門の中心を結ぶ宮中軸線は，N26′30″Wであり，宮東外濠は宮中軸線に対して北で西に20′振れることになる。今回の調査によって，宮東外濠は宮東北隅から約643m南の地点までほぼ確定できたことになる。なお，国土方眼による今回検出した地点での宮外濠心の位置は次の値をとる。

$$\begin{cases} X = -166{,}104.0\ m \\ Y = -\ \ 16{,}942.0\ m \end{cases}$$

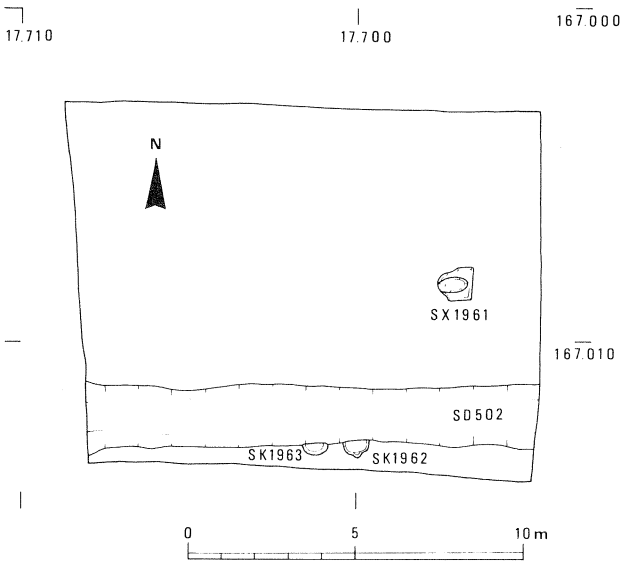
藤原宮第19－２次の調査

（昭和51年10月～昭和51年11月）

この調査は橿原市の農業用倉庫建設に伴う事前調査である。調査地は藤原宮の推定南面西門の北西にあたり，内濠の存在が予想される位置に東西15m，南北13mのトレンチを設定した（３頁の図参照）。

検出した主な遺構には藤原宮期の宮南面内濠SD502と，その北で検出した柱穴SX1961がある。それ以降の遺構として内濠SD502の南岸で検出した２つの小土壙SK1962，1963がある。

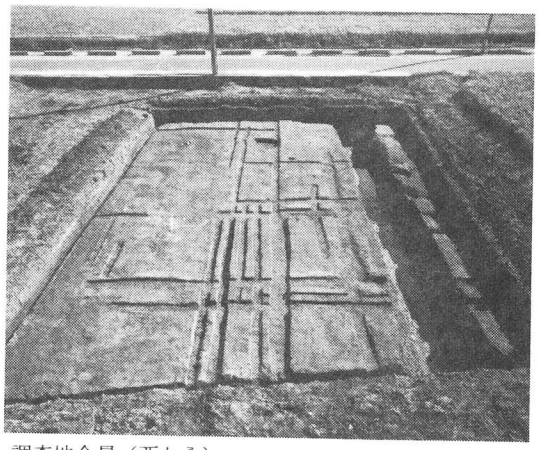
〔**遺構**〕　内濠SD502は幅2.1～2.6m，深さ１mの断面逆台形を呈する素掘りの溝である。堆積層は３層からなり，上層からは軒瓦を含む多量の瓦類が，また，中・下層からは木器・木簡を含む木屑が多量に出土した。柱穴SX1961は1.1m×0.7mの長方形を呈し，西に抜取穴がある。ただし，これに対応する柱穴は調査区内では検出できなかった。土壙SK1962，1963はいずれも内濠SD502より新しく，径0.8mの不整円形を呈する。埋土には藤原宮期の瓦を含む。このうちSK1963は深さ１mに達し，底部から完形軒平瓦１点が出土した。



第19－２次調査遺構実測図

〔**遺物**〕　今回の調査で出土した遺物は，藤原宮期の土器・瓦・木簡等で，この外に少量の弥生式土器がある。藤原宮期の土器には須恵器・土師

器があり，内濠SD502等から少量出土した。須恵器は杯・蓋・甕・壺等があり，土師器には杯・椀・甕等がある。瓦類は主に内濠SD502の上層から出土し，整理箱にして30箱程ある。丸瓦と平瓦が大半を占めるが，ほかに軒丸瓦３点，軒平瓦23点，面戸瓦５点と，熨斗瓦，隅平瓦等が少量ある。なお，このうち軒平瓦6646Gは新出の型式である。また，丸瓦凹面に線刻した文字瓦が１点あり，「寺」「来」「文」等が判読できる。


調査地全景（西から）

木簡はSD502の中層を中心に約55点が出土した。大半は削り屑であるが，原形をとどめ釈読できるものは次のとおりである。

1. （表）「　且鮭者速欲等云□□　　」
   （裏）「以上博士御前白　　宮守官」
2. （表）「□進乎　」　　（裏）「月廿□□」
3. 「時尓和」　　4. 「新大ア十口」
5. 「□□□□自女卅　舟木若子女卅五□槐□□」
6. 「□主高階□」（削り屑）
7. （表）「依首寺□」
   （裏）「(有カ)曽□有」
8. 「□□□相女□□□　　□」

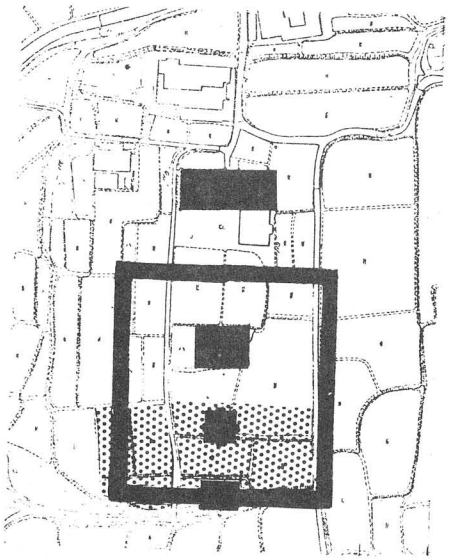
内濠SD502は藤原宮第１次調査で検出しており，南面中門心より280m西での今回の調査結果と合わせると，宮南面内濠は第６座標系の方眼西に対し南へ44′12″振れていることが明らかになった。これに対し，宮中軸線は真北に対し西へ26′30″振れることが判明しており，宮南辺は正しく直交しないと考えられる。

山田寺第1次の調査

（昭和51年4月～昭和51年12月）

奈良県桜井市山田に所在する山田寺は，塔・金堂・講堂跡の土壇や礎石をよく残し，昭和27年に特別史跡に指定された。昭和50年3月，史跡指定地の国有化が進み，昭和51年度から，史跡整備のため伽藍中心部に数カ年にわたる発掘調査を実施することとなった。初年度は，残存する塔の土壇を中心に，中門・東西回廊推定地を含む約2,700 ㎡を発掘調査した。その結果，塔の基壇規模，基壇の築成状況，塔に至る参道，中門，西回廊などが明らかになった。塔の中軸線は，国土方眼北に対し北で約1.5°西に傾いている。

なお，山田寺伽藍配置復原図で，金堂と講堂の間に北面回廊を通したのは，金堂と講堂の間隔が塔と金堂の間隔に比べて大きいこと，飛鳥寺や法隆寺のように講堂が北面回廊の後方に建つ例があることなどの理由に基づくが，1つの試案であり，今後の調査によって明らかにしていきたい。



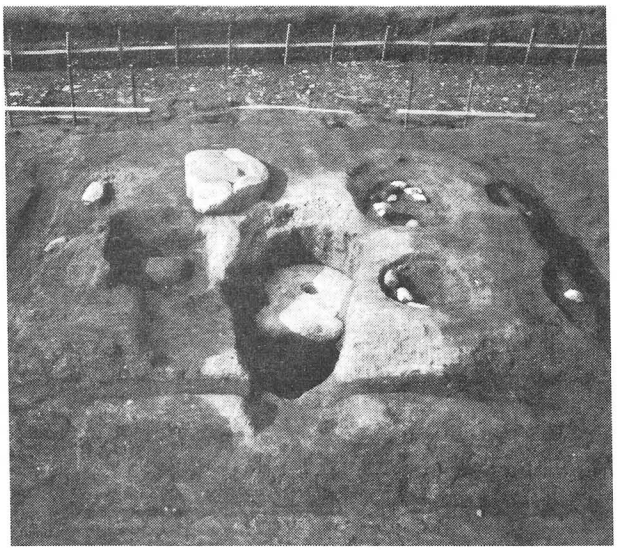
山田寺伽藍配置復原図

I　遺構の概要

〔塔〕　塔SB005の基壇は一辺約129m（43尺）を測る方形土壇で，四辺の中央部に階段の跡である張り出し部を有する。礎石は心礎と四天柱のうち西北隅のものだけが原位置に残る。礎石の据え付け跡は，四天柱のうち東南・東北の2カ所，東側柱列のうち北第1・第2・第3と北側柱列のうち西第2にあたる位置，計6カ所で確認した。これらの据え付け跡から塔の平面規模が，3間×3間で，柱間は中央間8尺，脇間7尺

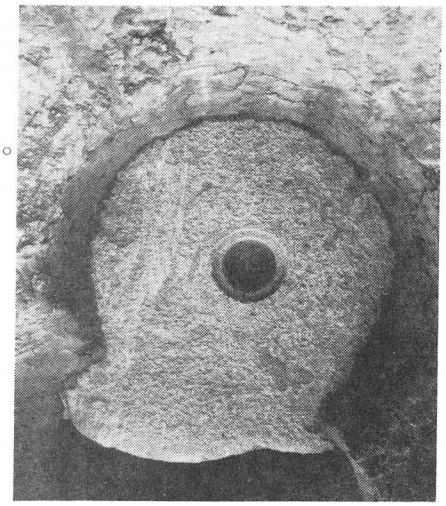
であることが判明した。

西北隅の四天柱礎石は，長径1.62m，短径1.2m，厚さ0.58mの安山岩製で，上面に径1mの円柱座を作り出している。東南隅四天柱の据え付け痕跡には，花崗岩礎石の底部破片が残っており，四天柱礎石は安山岩と花崗岩を併用していることがわかる。発掘以前から心礎位置に露出していた礎石は，従来心礎かと疑われてきたが，基壇地下から心礎を検出したので動かされたものであることが判明した。この礎石は，長径1.8m，短径1.45m，厚さ0.6mの花崗岩製で，上面に径約1mの円柱座を作り出している。おそらく明治年間，心礎周辺の既掘坑を埋めた際に四天柱礎石を転がしたものと考えられる。


塔心礎と礎石すえつけ穴（南から）

心礎は基壇上面から1m地下にあり，花崗岩製で，大きさは南北径1.72m，東西復原径約1.8m，厚さ0.84mを測る。心礎上面は平滑に加工し，中央部に舎利孔がある。この舎利孔は2段に穿たれており，上段の直径は30cm，深さ3cm，下段の直径は23cm，深さ15cmを測り，底部は椀状を呈する。内面には赤色顔料が附着していた。上段は蓋を受けるためのものとみられる。

心礎下面には径約1mの円柱座を，鑿痕を残す荒い仕上げで作り出している。この底部の円柱座の解釈としては，四天柱礎石として用意した礎石を，途中で予定変更したものとすれば，四天柱礎石推定の厚さ0.6～0.75mに比べて厚すぎる点にやや難点があり，他の場所で使用された礎石を山田寺へ搬入し，心礎


塔心礎

として再利用したとすれば，円柱座に仕上げ加工が行われていない点に疑問が残る。

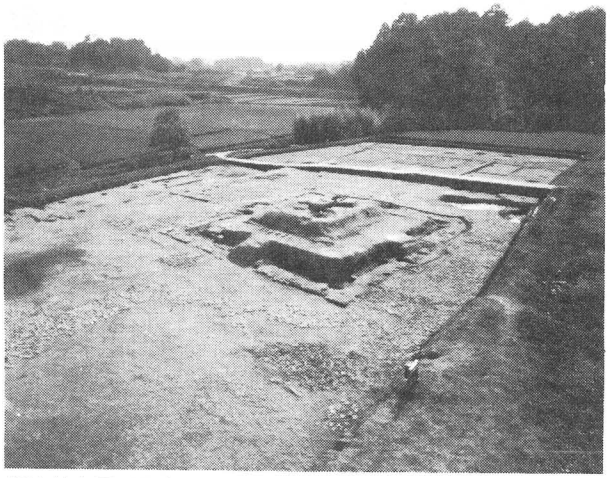
基壇高は旧地表の瓦敷き面から四天柱礎石上面まで約1.8mの高さとなる。基壇の外装は，花崗岩の地覆石の一部と抜き取り穴がよく残っていたが，羽目石・葛石は残っていない。ただし，基壇周辺からは凝灰岩の切石が多数検出され，それらの中には，縁に小さな段をつけて仕上げた石があり，羽目石・葛石は凝灰岩であったと見られる。

地覆石の大部分は抜き取られ，花崗岩の底部の風化剝落した部分が土に附着してその痕跡を留めるのみであったが，塔基壇東側では，長さ0.6m，幅0.5m，高さ0.44mのほぼ全形をうかがえる地覆石が1個残存していた。上面には，羽目石を立てる幅8cmの凹みを作り出している。抜き取られた地覆石を復原すると，幅0.5m，長さ0.6～0.8m，高さ0.4～0.5mのものが最も多い。概して，基壇の隅と階段部分に大型の石を使っている。

階段は幅3m，出が1.5mに復原できる。基壇の周囲には幅1.4mの犬走りがめぐっている。犬走りは縁石に雲母を含む砂岩系の黒い石を並べ，縁石と基壇の間にも同質で縁石よりも小さな石を敷いている。縁石は塔の東半分が最もよく残っており，幅0.3～0.4m，長さ0.3～0.8mの大きさである。犬走りの縁石は，階段の張り出しの出と同一線上に揃っているので，犬走りは基壇化粧当初の仕事と考えられる。なお犬走りは階段前面にも設けられているので，犬走りも階段前面では張り出している。その大きさは，幅4.8～5m，出0.8～1mと，四方やや不揃いである。階段前面の犬走り張り出し部分の石は，10cm程度の小さな縁石と同質の石を使用し，西側では塼，南側では花崗岩に一部変えている。また，この階段部分をめぐる犬走りは，塔基壇の東西・南北中軸線に対して正しく左右対称にならず，塔基壇および階段の出にそろえて基壇を方形にめぐる当初の犬走りに対してやや時期的に遅れ，後に付加されたものと考えられる。

次に基壇の築成状況について述べる。まず整地土および地山を，基壇平面よりやや大きく南北15m，東西16mの方形に，約1m掘り込み地業を行なう。東側は2段の掘り下げを行なう。東側東端で約0.5m掘り下げ，さらに2m西へ行

った所で，約１m掘り下げている。しかし，北・西・南側では１段になっている。つぎに約0.2×0.2m程の角礫を底に置く。その後約1.6mの厚さに黄褐色粘質土と灰色砂質土の山土を交互につきかためて版築する。この場合，整地土より上の版築は，掘り込み地業より外側に出る部分がある。


調査地全景（北東から）

次いで心礎を入れる穴を掘り，心礎をすべり込ませる。南北断面では，すべり込み穴の南北両壁が急傾斜しているので，すべり込ませた方向は東・西いずれかの方向であろう。その後，心礎周辺を黄褐色粘質土と灰色砂質土の山土でつきかためる。そしてさらに上約１mほど版築をおこなう。この上層の版築では，下層の版築にみられる黄褐色粘質土と灰色砂質土のほか，灰色粘土と花崗岩の粉末が入っている。この版築をおこなう過程で，心礎上面の周辺に根巻きと思われる黄土色の粘土を置いている。この粘土は，心礎上面の既掘坑によって大部分が破壊されているので，全体の形状をうかがうことはできないし，法輪寺塔で検出された添木の痕跡も認めることができなかった。しかし，残存している部分では，版築土の各層とかみ合っており，北側では11層，南側では５層の粘土ブロックを認めることができた。この粘土ブロックが根巻き粘土であるとすれば，心柱を立てる時点は，上半部分の版築を行なう以前となる。

なお，階段の張り出しは，基壇土を削り出して作っているが，最初の版築土を一度部分的に削り取り，新たに黄褐色粘土を置いて突き固めている。この中には，凝灰岩の粉末が混っており，この階段部分黄褐色粘土の突き固めの時点には，すでに塔の羽目石や葛石および階段施設を作るために凝灰岩を持ち込んでいることがわかる。

〔**参道・瓦敷き**〕　塔の南側で，塔と中門を結ぶ参道SX004を検出した。こ

の参道は瓦敷きからなるもので幅1.5m（５尺）を測る。瓦敷きの両端には人頭大の花崗岩を並べて仕切っている。

塔周辺では，瓦敷きを検出した。瓦敷きの中には，平瓦が最も多く，他に丸瓦・鴟尾・単弁８弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・棰先瓦・熨斗瓦などの瓦類の他に，須恵器の大型の甕の破片など種々の材料を用いており，またそれらの間に混って土師器杯，甕，須恵器杯，蓋，瓶など天平年間から奈良末の土器類を検出した。瓦敷きの範囲は，塔周辺を中心とし，発掘区東北隅にも広がっているが，また全く瓦敷きの存在しない場所もある。この瓦敷きの存在しない範囲について，あるいは建物跡かと疑われたが，そのような痕跡は認めることができなかった。瓦敷きはおそらく地盤舗装に関連したものであろう。

瓦敷きの平瓦は，凸面を磨り消したもの，格子叩き目を有するもの，縄叩き目を有するものなどがあり，凹面に「大」のヘラ描き文字を持ったものがある。縄叩き目を有する瓦は比較的少ないが，南北3.5×東西９mの範囲で縄叩き目の瓦を置き，南北両側に格子叩きの瓦を置いた箇所がある。なお，塔の東側では，瓦敷きの中に直径30cmの円筒土管を１個埋め込んでいた。

〔**中門**〕　中門SB003の推定位置では中門基壇の一部と掘立柱の柱穴SX013を，桁行４間，梁行１間分検出した。柱穴は，桁行が11～14尺の間で不揃いであること，柱穴の大きさに比べて柱間が広いこと，伽藍中軸線上に中央の柱穴があることなどから，中門建設のための足場穴ではないかと考えられる。

現在，基壇土の大部分と礎石はすべて失なわれているが，過去において，中門推定地の東で３個，西で２個の礎石が掘り出されたという。前述の柱穴を中門の足場穴として復原すれば，中門は桁行３間，梁行２間に復原でき，柱間は桁行13尺，梁行約14尺前後となる。

以上のように，出土した柱穴を足場穴と解釈したが，こう考えることに全く疑問がないわけではない。まず，礎石および据え付け痕跡がすべて失なわれて足場穴だけが残るだろうかという疑問があり，つぎに，塔から中門へ向かう参道の南端と，中門の足場穴検出面とは１m程の高底差をもっており，中門地区が塔周辺とかってほぼ同じレベルであったとすれば，足場穴は1.6mにも達する

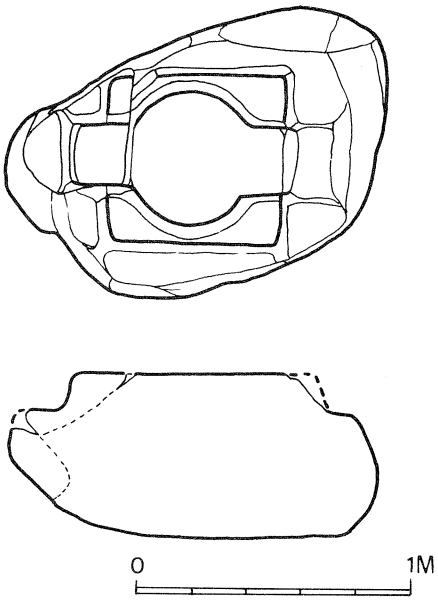
深さとなる。このような足場穴はまず考えられないので，中門地区は当初から一段低い位置にあったと考えられよう。

この場合は，途中に階段施設を設定しなければならないが，該当する部分は，東西方向の近世～現代におよぶ3時期の溝によって破壊されており，確かめる手段がない。しかし礎石の推定位置から中門北側の軒先を14尺程度と考えると，中門の軒先と参道の南端とは1.5～2ｍの余地があり，階段施設を設けるに充分な広さを有している。また，最も西側で検出した1個の掘立柱の柱穴を，中門西側の軒先に関連する足場穴とすれば，西側の軒の出は15尺前後となる。こうした点や南面回廊とのつながりを含めて，なお検討を要する点が多々あるが，今回の調査の範囲では中門建設のための足場穴とするのが最も妥当であろう。

〔**推定回廊跡**〕　塔跡の西側を走る道路の西は，塔周辺に比べて一段低くなっており，後世の水田造成と耕作による削平が著しい。この推定西面回廊地区では，塔の中心から約37.5ｍと41.7ｍの位置で二カ所ずつ礎石落し込み穴を検出した。これが西回廊SC070に関係するものとすれば，梁行約4.2ｍ，桁行約3.6ｍの単廊が復原できる。

この西回廊の位置を伽藍中軸線によって東に折りかえすと，東回廊SC060の位置は現在の里道の東にあたる。これに隣接する調査地区東端では瓦敷き上のバラス面から多数の完形丸・平瓦が折り重なるような状態で出土しており，東面の回廊をこの位置に推定して，ほぼ誤りないものと思われる。

なお，中門から西側の南面回廊へ移行する部分に，近世の水路が検出されたが，その中から1個の花崗岩製礎石が出土した。この礎石は，径0.63ｍの方座の上に径0.49ｍの円柱座を造り出すもので，円柱座の両側には，地覆座がある。これを中門の礎石



水路出土の礎石実測図

とすれば，東西側柱中央の位置に比定できるが，ただこの場合は３方に地覆座を持つのが普通である。こうした点を考慮に入れ，ここでは南面回廊の南側柱の礎石と考えた方がよさそうである。

〔**土壙・井戸・その他**〕　塔の南西方向で検出された土壙　SK006は，南北９ｍ，東西16ｍ，深さ1.1ｍを測る。土壙内からは，完形の軒丸瓦２点を含む多量の瓦，鞴の羽口，鉄滓，手斧の削り屑，刀子の柄，７世紀後半の土師器・須恵器などが出土した。この土壙は出土遺物の内容および年代から，伽藍造営時の廃棄物等を一括して捨てた穴と考えられる。

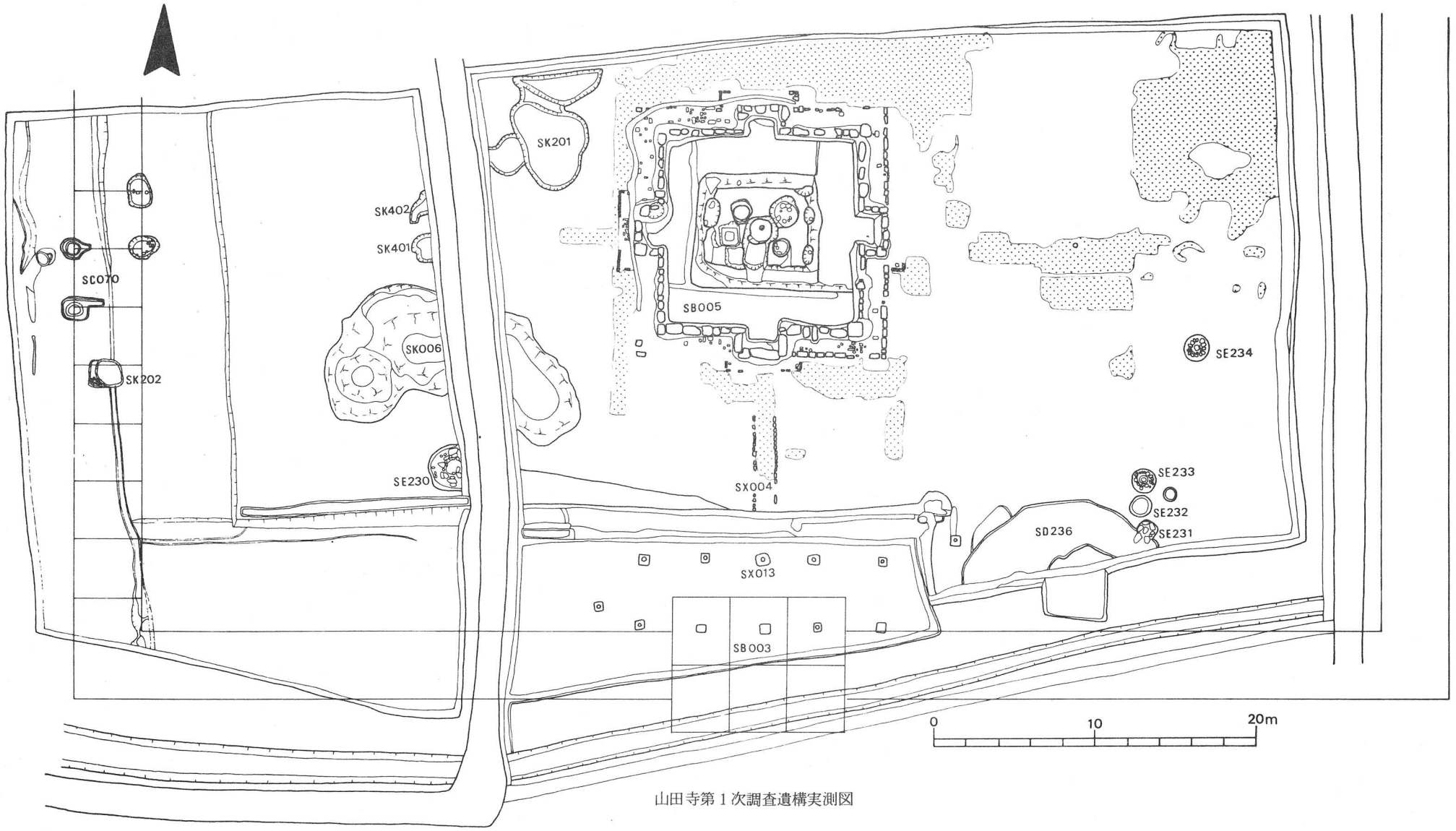
SK401，SK402は，径約２ｍの不整形の土壙で，深さ1.2ｍ，土壙内から遺物は出土していない。同じ性格の土壙は，塔基壇たち割りの際にも，整地土の下から検出した。これらは山田寺造営前のものであるが，性格は明らかにし難い。

中世の瓦溜りSK201は，東西約６ｍで，南北長約８ｍ分を検出したが，北は調査区外に広がる。土壙内からは多量の瓦とともに，瓦器片が出土している。

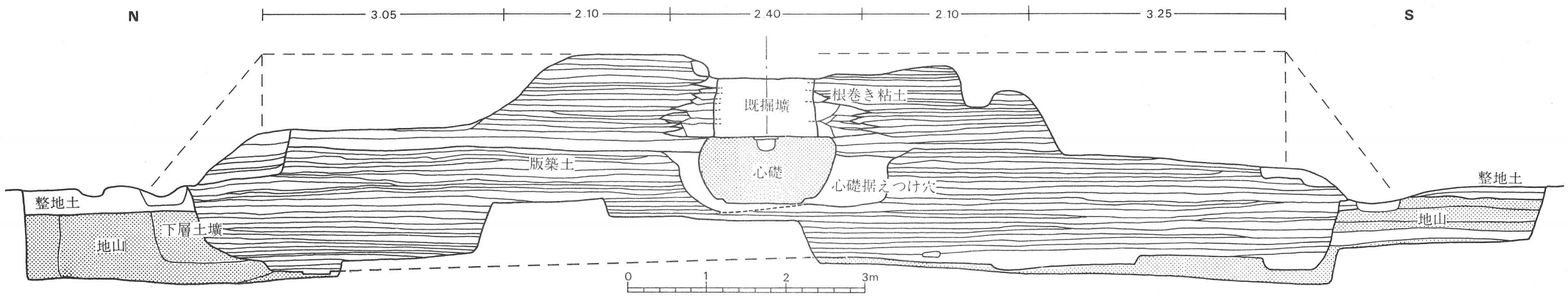
SE230は平面不整円形を呈する石組井戸であるが，東側は道路下にまで延びている。南北径1.4ｍ，底面の内径１ｍ，深さ約２ｍに達する。花崗岩の乱石積である。井戸内からは，曲物の底板・陽物形木製品・瓦器椀・小皿・土師器小皿・青白磁合子片・瓦が出土した。裏込めの土には13世紀の瓦器を含む。

SE231・SE234は周囲及び底を石組とする井戸である。SE232は平面が円形で，掘り方は深さ1.7ｍに達しているが，内側から，井戸枠などの施設は検出されなかった。

SE233は石組井戸で井戸底に曲物を２重に入れ込む形式である。曲物の底には板石を敷く。外側の曲物は，高さが10㎝で，外径47㎝と，外径45㎝の二つの曲物を合わせ，38カ所に木釘を打ち接合している。内側の曲物は，外径34㎝，高さ23㎝である。SE233とSE234には，井戸埋土に竹をさし込み，SE231の底からは瓦器が出土している。SD236は幅３～５ｍの水路の跡であり，蛇行しながら西流している。この水路は中門建設以後で井戸SE231を作る以前に流れはじめたものである。



山田寺第１次調査遺構実測図



山田寺塔基壇南北断面図

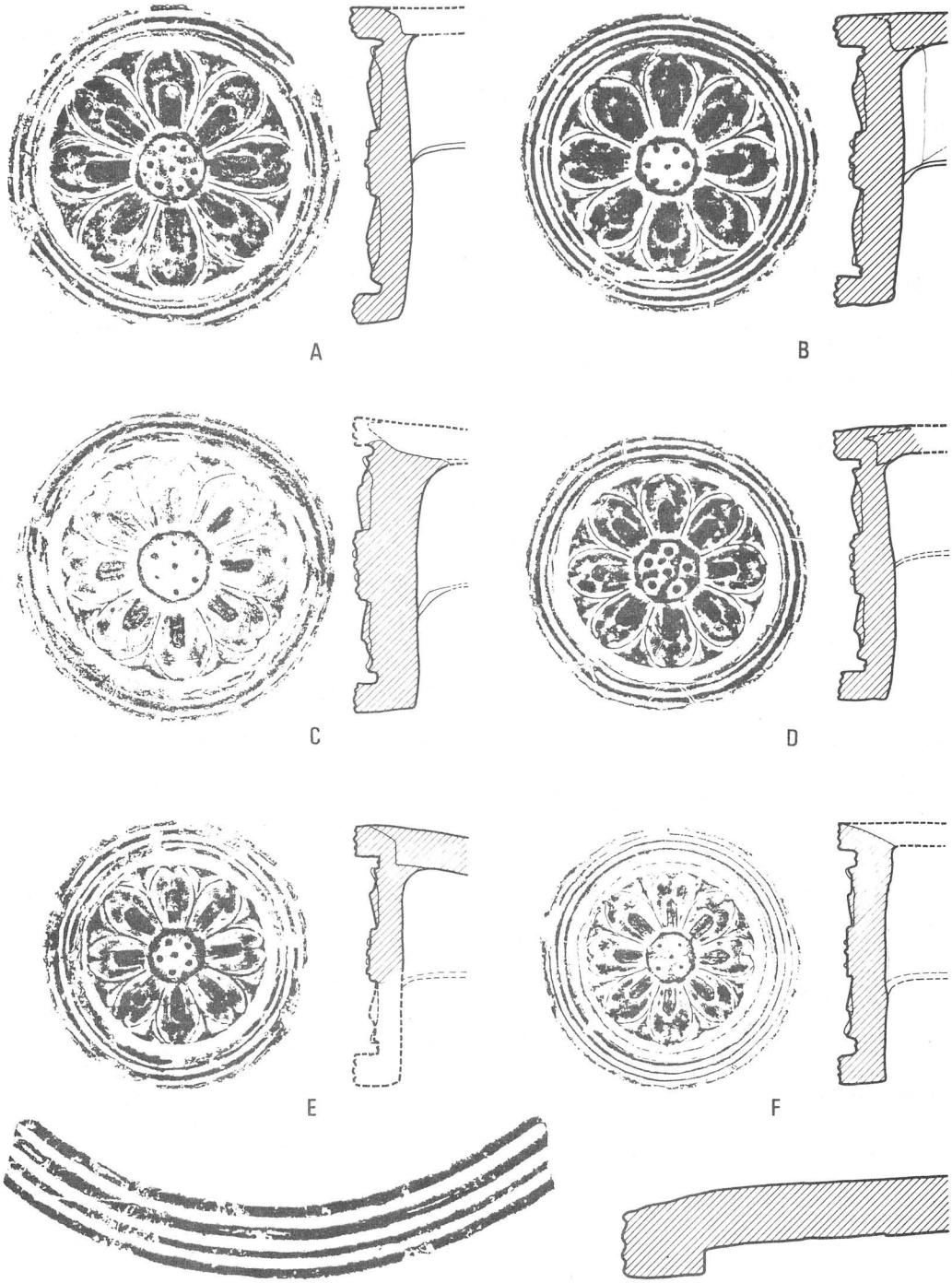
〔**土層および塔廃絶の時期**〕　塔の東側では，地山の上に直接瓦敷きが載っているが，塔の西側では0.3*m*前後の整地（褐色粘質土）を行ない，その上に瓦敷きが載る。この瓦敷きの年代は，出土した土器から天平年間～奈良末と判断される。

瓦敷きの上には，バラス・瓦を含む暗灰色粘土のバラス層がある。このバラス層からは，10世紀の土師器が出土している。発掘区東側では，このバラス層の上から垂木や茅負などの建築部材が出土した。この部材は，焼けた痕跡を全くとどめておらず，また，いずれも東回廊に近い位置から出土しているので，東回廊に関連するものと思われる。おそらく，東回廊は，10世紀頃に倒壊したのであろう。

その後，塔の東側では，暗青灰色粘土・青灰色粘土・灰褐色粗砂が堆積した。この上に，瓦・バラス・焼土を含む灰褐色粘質土が堆積している。この焼土層からは瓦器片が出土しているが，量的に少なく，正確な年代を決めることはできない。しかし，焼土が検出されることと瓦および塼仏に焼けた痕跡がみられることから，塔は焼失したとみられ，その年代は瓦器の年代から12～13世紀頃と考えられる。『扶桑略記』にみられる，治安3(1023)年に，藤原道長が山田寺に立ち寄った際，「覧二堂塔一堂中以二奇偉一荘厳」の記述と対比して考えると，この時点では東回廊は倒壊していたが，金堂及び塔は，まだ残存していたとみることができよう。

Ⅱ　遺物の概要

瓦塼類・金属製品・木製品・土器類などがある。軒丸瓦は総数2,183点で，1点の重圏文軒丸瓦を除き，他はすべていわゆる「山田寺式」の単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。この「山田寺式」軒丸瓦は，6種に分けられ，蓮子が1＋6のもの（A・B・C），蓮子が1＋5のもの（D・E），蓮子が1＋4のもの（F）に分けることができる。Aは，瓦当面径が最大で，弁も長くて幅が広い。Bは，中房が小さく，内区と外区の間に1重の圏線がめぐる。Cは，A・Bに比べると，中房が大きく，弁の長さにくらべると幅が広い。瓦当は厚く，重厚な作りである。Eは，Dにくらべると小形で，中房が小さい。D・Eいずれも



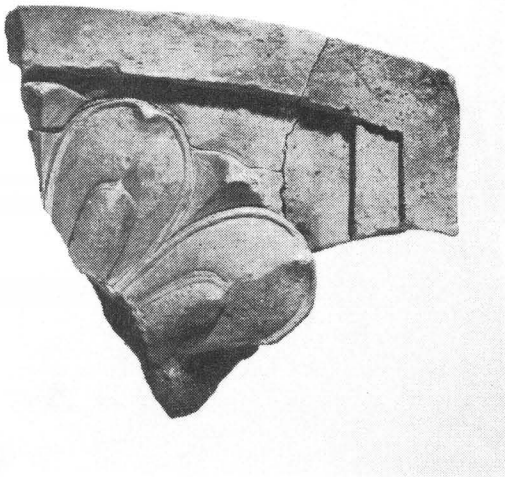
山田寺出土軒瓦（縮尺４分の１）

内区と外区の間に１重の圏線がめぐる。Ｆは，最も小形の瓦で，小さな蓮子を配している。内区と外区の間は広く，その間に１重の圏線がめぐる。Ａ～Ｆいずれも外区には４重の圏線をめぐらしている。出土点数は，Ａ：341点（20.7％），Ｂ：476点（28.8％），Ｃ：89点（5.4％），Ｄ：703点（43％），Ｅ：２点（0.1％），Ｆ：32点（２％）で，Ｄが最も多い。

多くのものは瓦当と丸瓦部が剝離しているが，Ｂには丸瓦部が接合する例があり，玉縁を有している。瓦当面と丸瓦部の接合状況は，斜めに切り落した丸瓦部端面に格子目の刻みを入れて接合するが，Ｃの中には瓦当裏面にも刻みを入れるものがある。重圏文軒丸瓦は，6012 型式で瓦当裏面に布目がある。

軒平瓦は大部分が重弧文で，四重弧文軒平瓦が９割以上を占め，三重弧文がわずかに認められる。重弧文以外には，奈良末の均整唐草文（中心飾り逆転）が出土している。これら「山田寺式」軒丸瓦と重弧文軒平瓦は，胎土に砂粒を多く含み，焼成は堅緻で，色調は暗灰色を呈するものが多い。

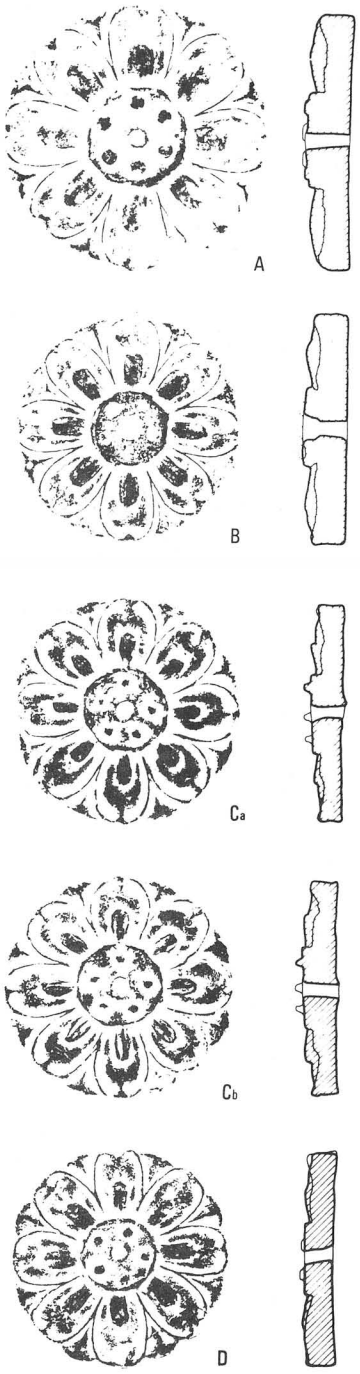
鴟尾は頭部片など，２個体分以上出土している。全体の形は不明であるが，腹部片には単弁蓮華文様を重ねている。鬼瓦には単弁蓮華文２種，奈良時代の鬼面文２種がある。蓮華文はＡ・Ｂ２種に分類できる。Ａは大形で弁はシャープである（写真参照）。Ｂは Ａよりやや小形で（表紙カット参照），弁の盛りあがりもＡに比べて薄い。Ｂは，ヘラ削りによって弁の反転を強調している。また，Ｂの蓮子は，十文字の割り付けを行なった後，竹管をさし込み，穴をあけ，その中に粘土棒を入れている。Ａ・Ｂいずれも両側下端にくり込みがあり，降り棟に使用したと考えられる。鬼面文は，南都七大寺系統の鼻が高く，どんぐり目で，眉の線鋸歯文と周辺の連珠文をもつ鬼瓦Ａが１個体と，眉は平坦で



蓮華文鬼瓦Ａ（縮尺４分の１）

鋸歯文はなく，髪が上から下へ流れる鬼瓦Bが２個体が出土している。後者は奈良末頃のものであろう。

棰先瓦は，釘孔の周囲に６個の蓮子が１重にめぐるAと，５個の蓮子がめぐるB～Dとがある。Aは最も大形で，弁，子葉，間弁ともに肉太である。Bは弁のそり返りが大きく，子葉も太目で，弁中央にシャープな稜が走る。CはA・Dに比べて中房が大きく，弁が短かい。また蓮子が突出している。Cは子葉中央に稜線の入らないものCaと稜線の走るものCbとがある。Cbは彫り直しであろう。Dは，Bに類似しているが，Bより弁の反転が少なく，子葉も小さい。出土点数はCbが最も多い。AおよびBの中には，中房から間弁へ移行する部分に，２弁間隔をおいて４カ所，焼成前の刳りを行なうものがある。Aには側面に割り型によって製作されたと考えられる甲張りを残す例がある。

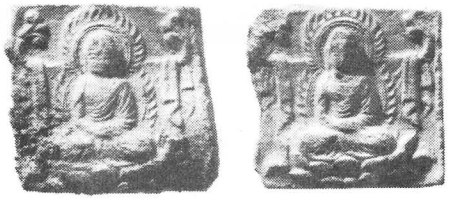


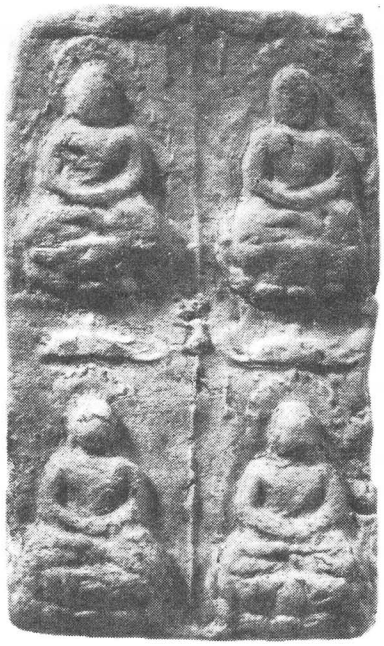
棰先瓦（縮尺５分の１）

鬼面文鬼瓦B（縮尺６分の１）

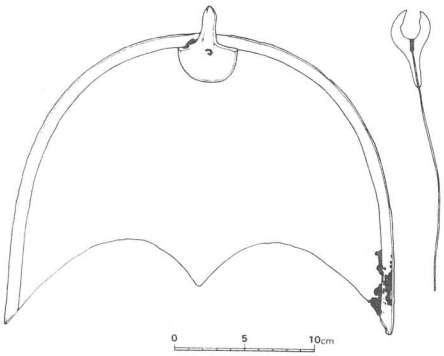
塼仏は６種類出土している。独尊像塼仏は一辺約３cmの方形で，最も小形である。見事な後屏を有している。四尊連座塼仏は，仏像の光背・頭部の輪廓によって，３種類に区別できる。十二尊連座塼仏は，最も数が多く，一体

の如来座像を横に4列3段に配している。釘孔は，中央の二尊の四隅に穿たれているものが多く，焼成前に穿孔している。釘は方形である。この十二尊連座塼仏の大きさは，縦約20㎝，横約15㎝になる。これは，『護国寺本諸寺縁起集』にある，「五重塔付銅板小仏，高五六寸，広四寸，右居不思議也」の記述の寸法とほぼ一致する。塔及び塔に隣接する地区に塼仏が出土している状況と，塼仏に金箔が押されあたかも銅製の如き感をいだかせるので，塔の壁に塼仏がは





塼仏



風招（黒ぬりは鍍金の残存部分）

められた可能性がある。しかし，塼仏の出土は，量的に多くなく，なお検討を要する。この他に，大形の独尊坐像塼仏の脚部の断片が3片出土している。

瓦類は，この他，面戸瓦・熨斗瓦・方形の玉縁をもつ角瓦とでも呼ぶべきもの，用途不明の瓦，文字瓦が出土している。文字瓦は平瓦凹面に，大のヘラ描きを有するものが多い。

金属製品では風招・金銅製飾金具・鉄製茅負隅留金具・鉄釘などが出土している。風招は，金銅製のうすい板で，奈良時代一般にみる両側の先端部が上にはねあがる型式とは異なり，両側先端が下にたれている。これは長谷寺の「銅板法華説相図」の多宝塔初重にみられる風招に最も類似し，実物では摂津伊丹廃寺例にやや似る。天武朝頃の遺物として，奈良時代の風招に先行する型式と考えられる。

木製品は，塔東のバラス層に載る青灰色粘質土から出土した建築部材，井戸から出土した曲物底板と陽物形木製品，SK006から出土した手斧の削り屑と工具の柄がある。建築部材には垂木，瓦座をもつ茅負がある。垂木は断面円形で，直径11㎝を測る。ただし両端に釘孔があり，垂木を転用材にした可能性がある。

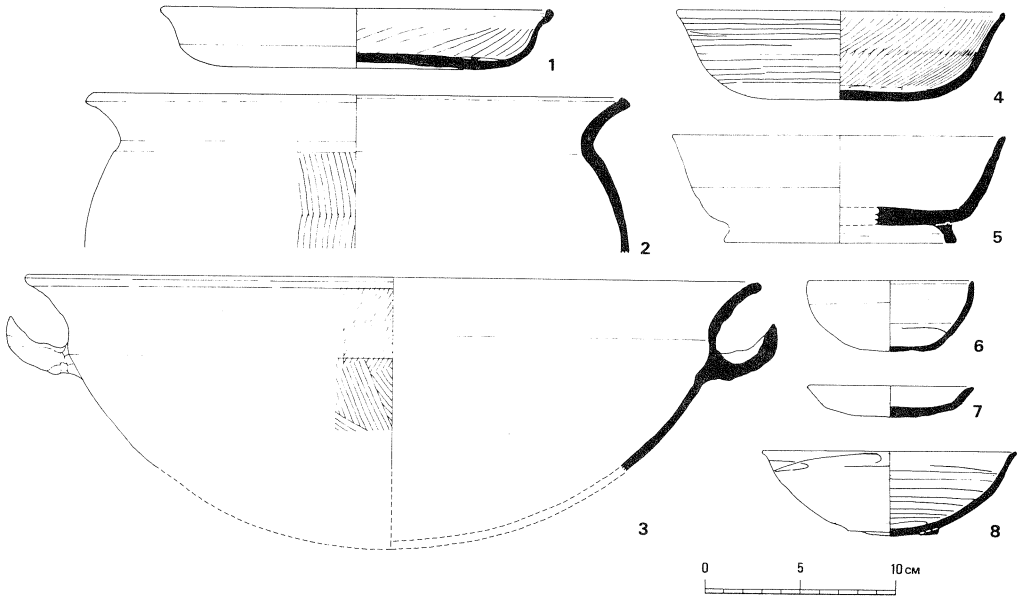
茅負は約9㎝の間隔を置いて，幅27㎝の瓦繰りがある。これらの建築部材には，焼けた痕跡は認められない。

土器は，SK006・瓦敷き面・バラス層・焼土層・井戸から出土したものについて述べる。SK006からは土師器杯AI・B・C・鍋B・須恵器杯AⅣ・B・瓶・

瓦座を有する茅負（縮尺11分の1）

甕などが出土した。この土壙出土の土器には６世紀初頭の須恵器杯・蓋を２例含むが，他は７世紀の土器で，藤原宮の段階よりやや古式の様相を呈しており，670～690年の間に位置づけられる。瓦敷き面からは土師器杯Ａ・甕Ａ・須恵器杯・蓋Ａ・瓶・甕などが出土した。蓋Ａは，SK006と同一時期であるが，他は平城宮のSK820出土土器やSK870に類似した特徴をもち，750～780年頃に位置づけられる。バラス層は，塔西側では攪乱状態であったが，塔東側では土師器杯Ｃが出土した。10世紀代に位置づけられる。焼土層からは，瓦器・土師器が出土したが，いずれも破片で，正確な年代を決めることはできない。井戸出土の土器は，瓦器椀・土師器杯である。瓦器は２例をのぞけば，白石太一郎氏編年の第Ⅲ段階初頭の第７型式，ほぼ13世紀前半に相当する。

今回の調査によって，塔の規模・中門および回廊の位置を明らかにし，ほぼ当初の目的を達成することができた。また塔を含む伽藍造営の際の廃棄物を捨てた土壙から，造営の年代の一端を明らかにし，塔焼失の年代についても，大体の輪廓をつかむことができた。なお心礎については，模型を複製し，南面回廊に関連があると推定した礎石とともに，飛鳥資料館に展示してある。



山田寺出土土器実測図（縮尺４分の１）1.2. 瓦敷き　3.4.5. ＳＫ006
6. ＳＥ231　7.8. ＳＥ230

大官大寺第３次の調査

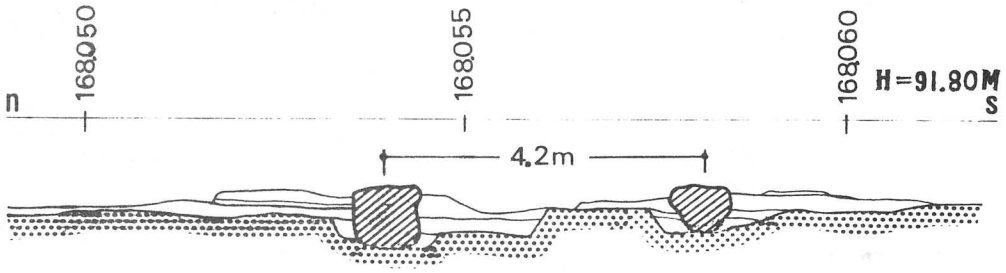
（昭和51年４月～昭和52年１月）

第３次調査は，南・東面回廊，寺域東限，中ツ道の検出，及びそれらの相互の関連の追求などを目的として実施した。検出遺構には，回廊，掘立柱建物，塀，溝，土壙などがある。

回廊は南面東回廊SC053を７間分，東面回廊SC051を４間分検出した。回廊東南隅は中門取り付き部から15間目にあたる。礎石はすべて原位置を保っており，梁行4.2ｍ（14尺），桁行各間3.9ｍ（13尺）である。脇門にあたる施設は検出されなかった。

基壇造成に際しては，掘込地業は行わず，旧地形の低い西よりでは盛土し，旧地形の高い東よりの部分は地山を削り出し，その上に数層積土している。基壇上には，軒瓦を含む瓦が落下した状態のまま検出された。そこでは後述するように，軒平瓦に対して軒丸瓦の個体数が著しく少いことが注意された。瓦を取り除くと，火災で堅くしまった基壇面に，垂木や野地板とみられる焼損材が遺存していた。基壇縁の礎石からの出は一定せず，また基壇外装や雨落溝が全くみられず，基壇造成が未完で火災にあった状況を示している。

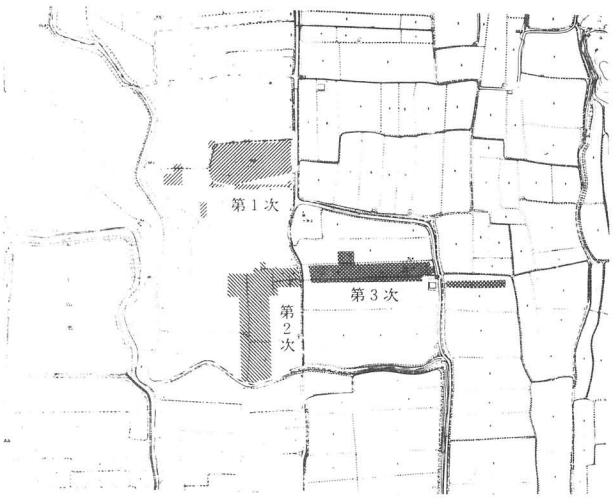
礎石の据えつけに際しては，まず，所定の位置に据えつけのための掘形を穿ち，礎石を据え，そのあとに基壇土を積土している。礎石は花崗岩で，大きさは1.3×1.0ｍほどである。表面は非常にもろくなっていて，現状では柱座などの造り出しは認められない。礎石の配列は，石の長軸をおおむね棟方向にそ



回廊土層図（168、426ライン）

ろえている。

南北溝SD260は，現状では幅1.4 m～4.0 m，深さ0.6 mほどであるが，本来は幅1 mほどの溝とみられる。溝内には手斧の削り屑など多量の木片や瓦・土器を含む。南北溝SD259，SD255はいずれも幅0.6 m，深さ0.1 mで，土器を含む。

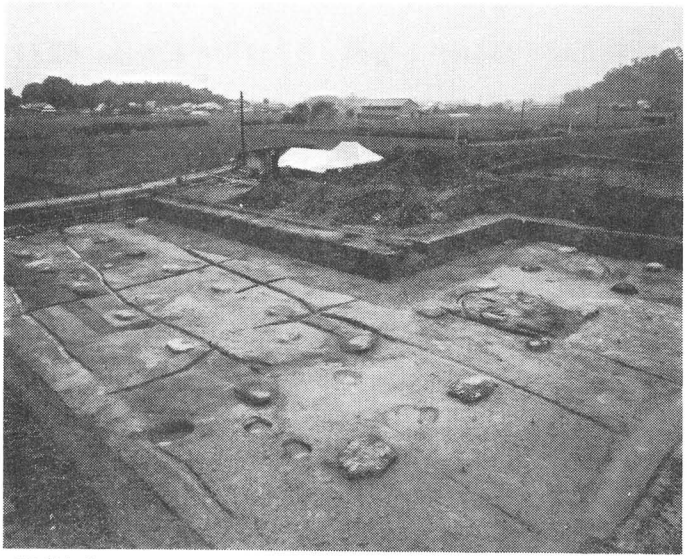


大官大寺第3次調査位置図（縮尺4000分の1）

SK253はSD255を切って存在する大きな土壙である。焼土や炭化物に混って，瓦・土器・鉄滓など多量の遺物が出土した。SK252も同様の土壙である。

南北溝SD250Aは幅13m，西の肩からの深さが0.6 mである。畿内第5様式の弥生式土器，5・6世紀の土師器・須恵器や馬歯が出土した。SD250BはSD250Aの東よりに幅5 m余りが認められる。フイゴの羽口や鉄滓とともに大官大寺式の軒平瓦（6661型式）が出土した。SD251は畿内第5様式の弥生式土器を含む自然流路である。

このほか，回廊下層で弥生時代の方形周溝墓SX270を検出した。わずかに周溝の一部を残すのみで，マウンドや墓壙は遺存していない。周溝内から畿内第5様式の弥生式土器が出土した。器種には，壺，長頸壺，甕，鉢，高杯などがある。


回廊東南隅

SD250の東側には南北に地山の高まりSX240が認め

られた。SD250の底から0.7 mの高さである。土壙SK245は4×4 mほどの長円形を呈する。東の壁は発掘区外へ出る。土壙内からは，手斧の削り屑や，土器，瓦とともに，木簡が7点出土した。釈読できる1点は次の通りである。

「讃用郡□里鐵十連」

里名の一字表記から，大宝から和銅初年にかけての年代が考えられる播磨国からの貢進物付札である。

南北溝SD244は深さ1.2 mで，溝の西肩は発掘区外に出て全幅は不明である。瓦器を含む中世溝である。溝底のレベルはSX240上面とほぼ同一である。

SD244以東には，掘立柱建物・塀・土壙・溝などがある。建物・塀には，真北に対し，東へ5°ほど振れるものと，真東西にほぼ一致するものとがある。前者はSD228・229・230で，掘形が小さく，柱間や柱筋が不揃いである。これらの建物の年代は，近接する7世紀中頃の土器を出土した土壙SK226や，南北溝SD224とほぼ同じ頃と考えられる。後者のSA231は前者にくらべて大きめの掘形を有し，掘形の切り合いによってSB229より新しいことがわかる。

出土遺物は，多種類にわたっているが，瓦・銅製品について述べよう。

瓦は回廊基壇とその周辺に膨大な量が堆積していた。回廊をはなれると，瓦の出土はほとんどみられなくなる。出土した軒瓦は，すべて「大官大寺式」である。軒丸瓦は6231Aが1個体，6231Bが4個体，6231BかCか不明のもの14個体である。軒平瓦は6661Aが3個体，6661Bが61個体，6661BかCか不明のもの3個体，小片で細別型式の不明のもの100個体を数える。

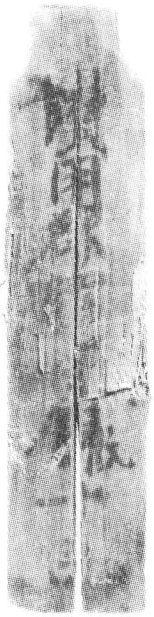
今回の調査で特徴的なことは，軒平瓦167個体に対し軒丸瓦は19個体と著しく少いことである。それでも，軒丸瓦6231BあるいはC，軒平瓦6661BあるいはCが大きな比率を示す点は第2次調査の結果と変らない。熨斗瓦について，その製作技法をみると，平瓦を焼成前に分割したうえ，さらに叩きしめを行って，曲率を減ずるという工程が加わる丁寧な作りのもので，同時代には他に類例をみない特異なものである。

銅製品には風鐸の断片がある。すべて小片で，火熱による変形が著しい。乳や舞の部分を残すものがあり，一部に鍍金の痕跡が認められる。すべて二次的

に移動した瓦堆積の中からの出土であるが，出土地点をみると，回廊の内側に出土する傾向が強く，中には塔使用のものが含まれている可能性がある。

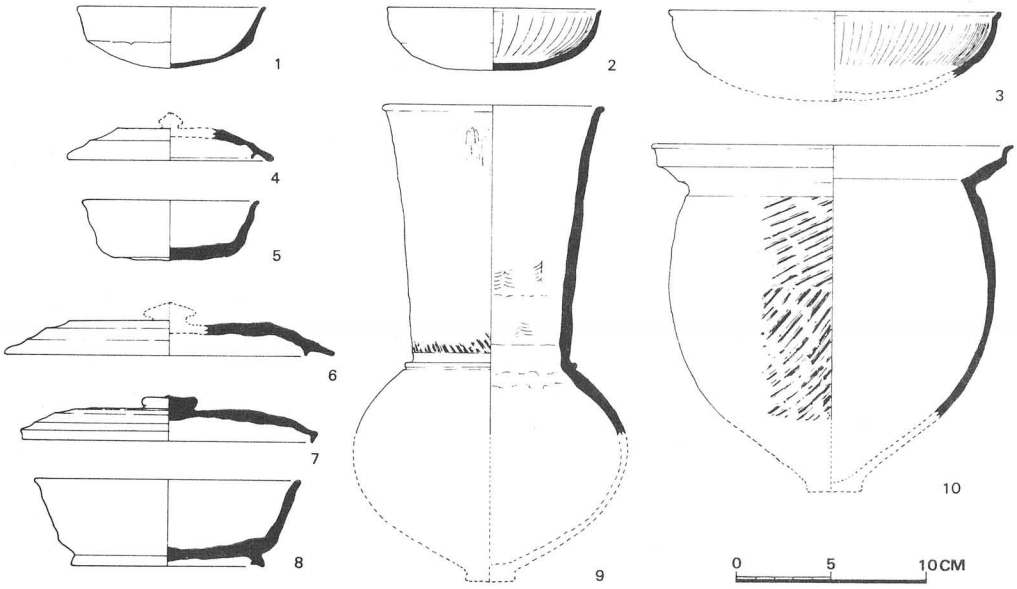
回廊東南隅を検出したことにより，回廊の全体規模の復原が可能になった。まず，中門心から回廊東南隅柱位置までは71.8 mである。これを中門心で対称に西へ折り返すと，回廊の東西総長は両端隅柱位置間で 143.6 mに復原できる。中門妻柱位置から回廊東南隅柱位置までは60 mであり，200 尺で設計がなされたと考えられる。

これまでの調査によって，南面東回廊は，ほぼ全面的に検出したことになる。南面東回廊の方位は真東西とほぼ一致し，既知の伽藍中軸線（真北に対し，北で西へ16′ 振れる。）とは，正確には直交しない。このことは，施工誤差か，造営の時期差によるものか，今後の検討を要する。



ＳＫ 245 出土木簡

回廊の方位が，少くとも南面東回廊については，真東西に極めて近いこと，



大官大寺第３次調査出土土器実測図

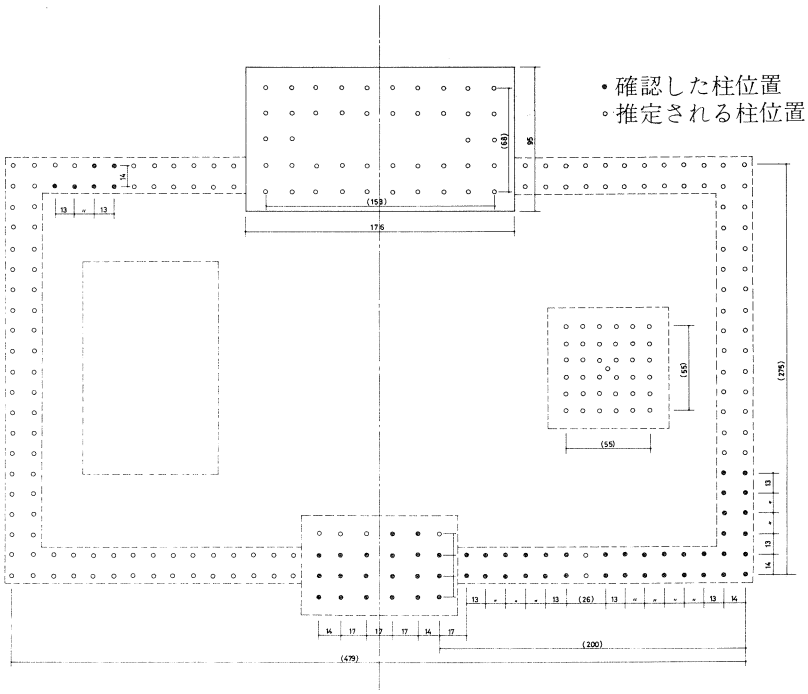
1. ＳＤ224　2.4.5. ＳＫ226　3. ＳＤ260
6. ＳＤ255　7.8. ＳＫ253　9.10. ＳＸ270

柱間寸法がよく揃い，礎石の上面高もほぼ同一レベルにあることなど，精度の高い造営の実態の一端がうかがわれる。一方，基壇造成については，掘込地業を行わず，整地面上に直接，基壇土を積むという，講堂・中門と共通した施工法によっていることも知られた。

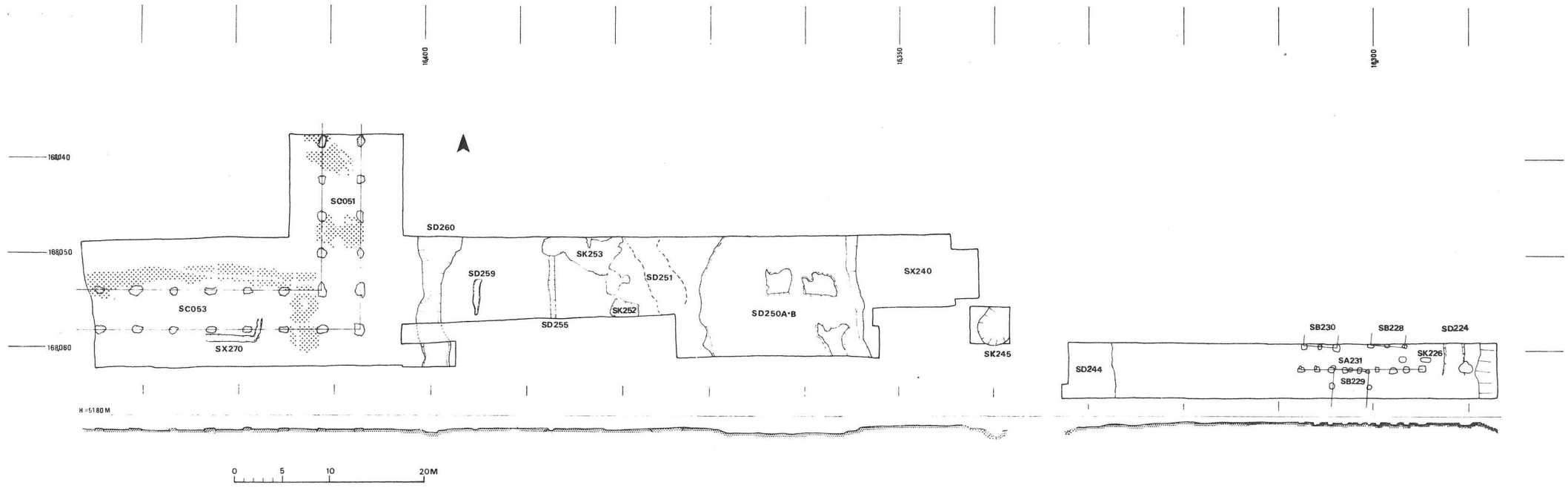
回廊の東方に寺域東限施設の存在を予想したが，調査の結果では，築地などの痕跡は認められなかった。ただ，南北溝SD255は，伽藍中軸線から91.8 mの位置にあり，この位置は講堂の西北方で検出した，寺域西限とも考えられる南北溝SD104（「概報４」参照）と伽藍中軸線との距離９２ mにほぼ一致することが注目される。ただし，いずれも検出遺構は小範囲にとどまり，寺域の区画施設については今後の調査に待たねばならない。

SD255・SD260などは，回廊に近い位置にあることや，鉄関係の木簡，フイゴの羽口，鉄滓，手斧の削り屑などの出土遺物によって，大官大寺造営に関連する一連の遺構とみることができる。

SX240については，現在，横大路以北までその痕跡がたどられている「中ツ道」の南延長線上にほぼ位置することが注目される。ただし，発掘範囲が狭く，その性格については即断を避けたい。また，中ツ道を利用して設定されたとされる藤原京東京極との関連についても今後の調査の進展に待つところが大きい。



大官大寺伽藍復原図



大官大寺第３次調査遺構実測図

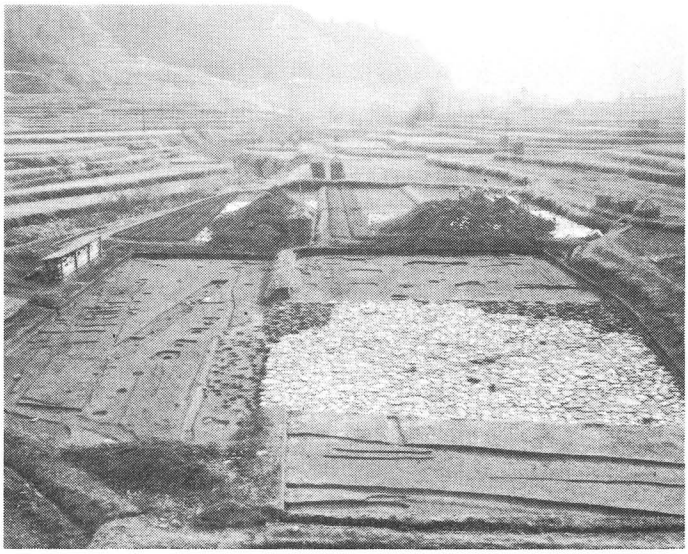
稲淵川西遺跡の調査

（昭和51年12月～昭和52年３月）

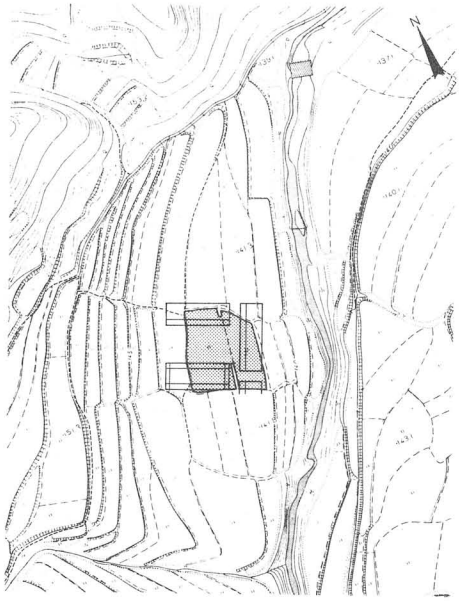
この調査は，飛鳥国営公園祝戸地区の駐車場建設に伴う事前調査として実施したものである。調査地は，坂田寺跡の西方約200m，稲淵川を隔てた水田中にある。冬野川との合流地点から上流へ約400mのこの付近は，北と西を通称「フグリ山」の山塊に画され，稲淵川との間に狭い平坦地が南へ伸びている。

調査は駐車場予定地の全域を対象とし，東西28m，南北30mの範囲を全面発掘した。調査地の基本的な層序は，上から耕土・床土・黄灰褐色土・暗灰褐色砂質土・灰褐色土の順である。遺構の検出は表土下約40cmにある暗灰褐色砂質土上面でおこない，敷石・柱根および柱抜取り穴を認めた。しかしながら，柱掘形は一層下の灰褐色土上面でしか検出できず，掘形の検出は最少の補足調査にとどめざるをえなかった。なお敷石の上面に限って厚さ３cm前後の黄色粘質土が堆積しており注意をひいた。

検出した主な遺構には，掘立柱建物４と石敷広場１がある。SB001は，発掘区の南西部で検出した東西棟掘立柱建物である。桁行５間以上，梁行４間であり，南北と東側で廂を検出しているから，おそらく四面に廂をもつ建物とみてよい。柱根（径25cm前後）が遺存するのは５カ所のみで，大半の柱は抜取られている。このため柱間寸法を正確に復原できないが，現状では身舎が桁行・梁行とも3.0m



調査地全景（北東から）

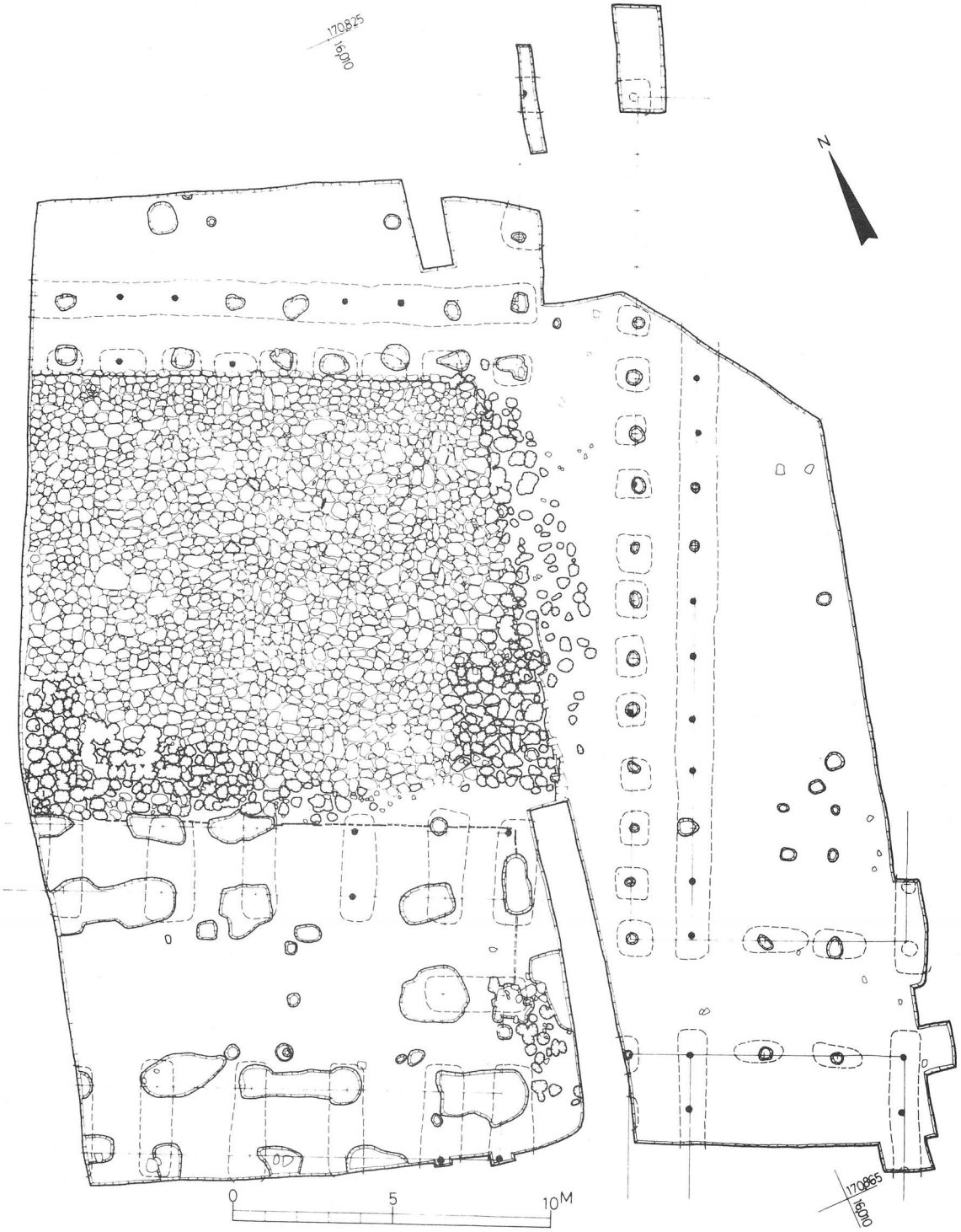


稲淵川西遺跡周辺地形図（縮尺3000分の1）

等間，廂については南北廂が2.1 m，東廂が1.8 mと考えられる。柱掘形は幅1 m，長さ3.2 m前後の長方形平面をもち，側柱と入側柱を一組として，一つの掘形内に2本の柱を立てる特異なものである。掘形の深さは約1.3 mあり，柱位置の底部には数個の礫を配して根固めとしていた。柱抜取り穴は，桁行方向に長軸をもつ不整楕円形の平面で，概して大きく，隣接する2本の柱を一連の穴で抜取っているところもある。抜取り穴内部には黄色粘質土が入っていた。SB001の北および東側柱外方に接して板材を検出した。北側で約10㎝，東側で約15㎝各々外方にあり，厚さ約1㎝，長さ1 m前後の板材を連ねている。全体に腐触が著るしい上に，各所で柱抜取り穴で分断されており，その性格は判然としない。SB001南側の板材については，今回の調査では確認できなかった。

SB002は，発掘区の北西部で検出した東西棟掘立柱建物である。桁行8間以上，梁行4間で南側に廂をもつ。柱間寸法は，桁行1.76 m等間，梁行では身舎が2.24 m等間，廂が2.08 mである。柱掘形には2種類ある。南側柱列および妻柱では，一辺1 m前後の方形掘形に各々1つの柱を立てた通有の形である。しかし入側柱列では溝状に穿った一連の掘形（以下「布掘り掘形」と呼ぶ）に9本以上の柱を立てる特異な方式である。おそらく北側柱列もSB003・004を参考にすれば，布掘り掘形であろう。布掘り掘形は幅1.1 m前後，深さ1 m前後をはかり，径約18㎝の柱を立てる。柱抜取り穴は楕円形の平面をもつが，SB001の抜取り穴に比べて小規模である。内部には黄色粘質土が入っていた。

SB003は，発掘区南東部で検出した南北棟掘立柱建物である。桁行2間以上，梁行4間で西側に廂をもつ。柱間寸法はSB002と同一である。入側柱列および東側柱列を布掘り掘形とし，径18㎝前後の柱を立てている。

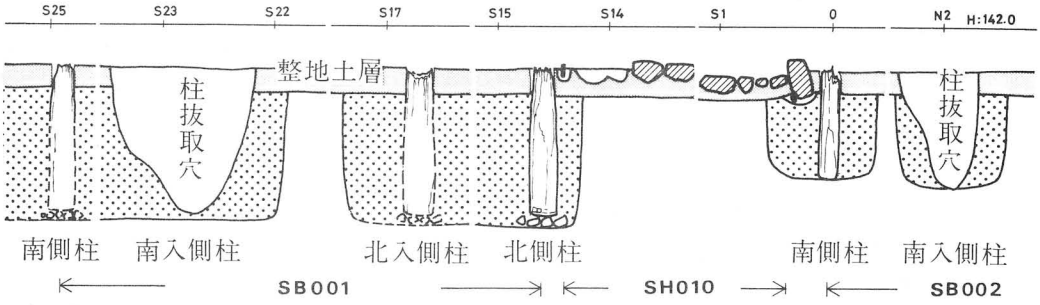


稲淵川西遺跡遺構実測図（縮尺 200 分の 1）

SB004は，発掘区の北東部で検出した桁行総長26.4 mにおよぶ細長い南北棟掘立柱建物である。桁行15間，梁行4間でSB003と同様に西側に廂をもち，両者の柱筋と柱間寸法は一致している。西側柱列と妻柱は個々に柱掘形をもつが，入側柱列および東側柱列は布掘り掘形である。すなわち16本の柱を一連の掘形に立てている。入側柱列の布掘り掘形は平均約0.7 mの深さをもち，柱位置付近ではさらに0.4 m前後掘込んで柱を裾えている。南半部の掘形底部は自然堆積の礫層に達し，掘形を埋めた土中にも大小の礫が含まれ，注意をひいた。妻柱の掘形は，SB002・003と同様に梁行方向に細長い平面をもち，柱間寸法・柱掘形の状況など3つの建物は同一の規格にもとづいて建てられたことがわかる。

SH010は，発掘区の中央で検出した南北14m，東西18m以上の石敷広場である。北は高さ15cm前後の石列で限り，南はSB001の北に接する板材で画している。東は敷石抜取り痕跡からSB004西端付近と推測され，西は発掘区外に拡がる。さらにSB001とSB003・004との間にも敷石抜取り痕跡がみられるから，石敷面が南へ帯状に伸びていた可能性は大きい。敷石は一辺40cm前後の花崗岩質の玉石を用いて全面に敷きつめている。一部で石が抜取られているが，全体に遺存の状況は良好である。

上述した石敷広場と4棟の建物は同一時期の造営によるものである。造営に際しては，まず灰褐色土上面を整え，柱掘形を穿って柱を立てる。次いでSH010北端の石列を裾えつけたのち，全面に暗灰褐色砂質土を入れて整地する。SH010ではとくに砂質の強い土を入れて敷石の安定をはかっている。SB001とSH010の境をなす板材は遺存が悪く，作業工程を判断できないが，暗灰褐色砂

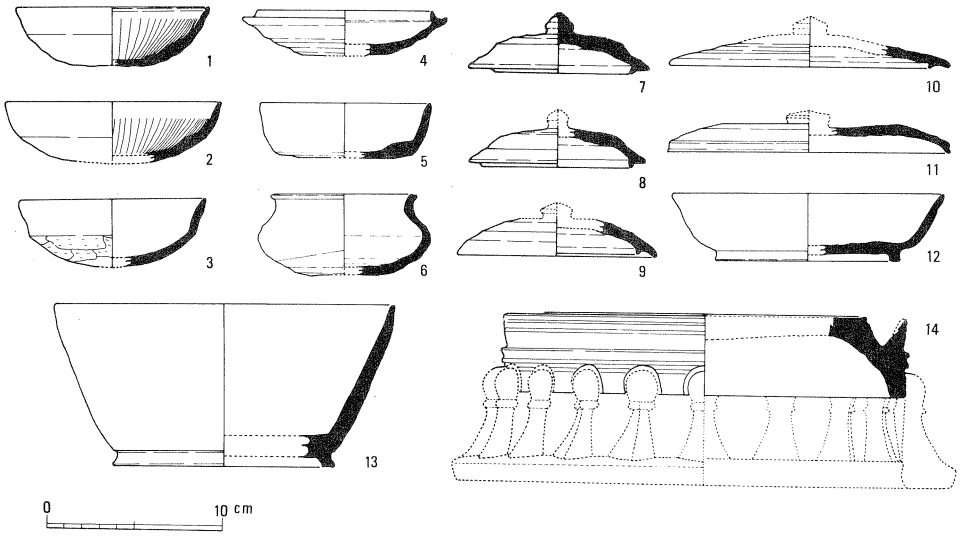


土層模式図

質土を掘込んで裾えつけている可能性がある。これら遺構の方位は，国土方眼方位に対し北で25.5°東に振れており，飛鳥地方の遺構方位としてはあまり類例のない数値を示す。おそらく，稲淵川と「フグリ山」とにはさまれた遺跡立地からみると，地形に限定された遺構方位なのであろう。

遺物は，発掘区各所から出土したが，全体に土師器・須恵器などの土器類が多く，金属器・瓦類などの出土は極めて少量である。遺物の多くは黄灰褐色土層に含まれ，柱掘形・柱抜取り穴あるいは暗灰褐色砂質土中など遺構と密接に関連して出土した遺物は少ない。とくに瓦類では遺構と結びついて出土した例はない。柱掘形や暗灰褐色砂質土に含まれる土器には1・2・4～8などがあるが，いずれも7世紀中頃以前のものに限られていて，遺跡の造営年代をうかがうことができる。また柱抜取り穴および石敷上面を覆う黄色粘質土中に含まれる土器には9・10・12～14などがあり，7世紀末前後の年代を示している。このうち蹄脚硯（14）はSB004西側柱の抜取り穴から出土したものである。その他，4は敷石抜取り痕跡内，11は黄灰褐色土から出土した土器である。ただし，敷石抜取り痕跡内からは，瓦器片をはじめ中・近世にいたる土器も出土している。

本遺跡は，今回の調査で初めてその存在が明らかになったが，敷石広場や掘



稲淵川西遺跡出土遺物実測図

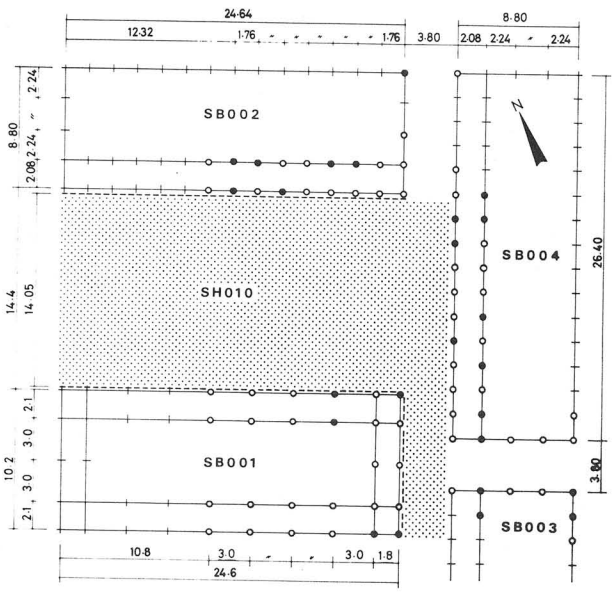
立柱建物など豊富な内容をもつうえ，遺存状況も良好であるから，今後「飛鳥」を知る上に不可欠の重要な遺跡ということができよう。以下では調査で判明した二三の事項について簡単にまとめておきたい。

まず遺構配置の整然たる規格性が注目される。SB001とSB002の東側柱列が一致すること，SB003とSB004の柱筋が一致すること，SB001妻柱の位置がSB003とSB004間の中央に一致すること，SB001・002とSB003・004の建物間距離がSB003とSB004間のそれに一致することなど，多くの点で建物配置の計画性をうかがうことができる。またSB001とSB002は，建物西半部を調査していないが，両者の桁行総長が一致するものと予想されるから，図示したように，9間と14間に復原できる。さらに発掘区周辺の地形を考慮すると，SB001・002の西方にSB003・004と同様な南北棟建物を想定するのもあながち困難ではない。もしそうであれば，SB001を中心とした東西対称の建物配置であり，遺跡の性格とも深くかかわってくる。今後検討すべき問題である。

建物配置と関連して，造営に用いられた基準尺の問題がある。SB004は桁行15間柱間総長26.40m，梁行4間柱間総長8.80mの建物であるが，桁行総長を現尺で換算すると87.120尺となる。これを逆に90尺と仮定すると1尺＝0.293$\dot{3}$$m$という数値がえられる。この数値を梁行総長にあてはめると30尺の完数がえられ，同様にSB003とSB004間の距離，SB002とSB004間の距離を換算すると13尺がえられる。SB001については，前述したように柱間寸法が不明確なため1尺＝0.293$\dot{3}$$m$の数値を検証しえないが，少なくともSB002～004の建物にはよく該当する。古代の造営尺については，各遺跡で復原が試みられているが，一般的に1尺は0.295mより大きい数値を示す。ただそれより小さい数値を示す一例として前期難波宮跡の諸遺構がある。孝徳朝長柄豊碕宮かとも推測されているこの遺構では，多少のばらつきはあるものの1尺＝0.292mの造営尺が復原されている。本遺跡と前期難波宮跡の2つの遺跡で0.295mより小さい造営尺が復原できることは，両者の年代が近いこととともあいまって興味深い問題といえよう。

本遺跡の特徴の一つに，一連の柱掘形内に複数の柱を立てることがあげられ

る。SB001では側柱と入側柱を2本一組とし，SB002～004では身舎側柱列の10数本の柱を一つの布掘り掘形内に立てている。これまであまり例をみない柱掘形の方式であるが，類例として前期難波宮跡の門があげられる。この遺構は内裏の東方にある桁行5間梁行2間の門（第20次調査で検出されたSB2001）であり，桁行方向に長い平面をもつ掘形内に3本の柱を一組として立てている。調査では一カ所しか確認されていないが，本遺跡の例を勘案すれば，おそらく東西2列，南北3列の計6カ所に柱掘形を穿ち，各3本計18本の柱を立てていた可能性が大きい。



遺構模式図

本遺跡の年代は，柱掘形内から出土した土器などからすると7世紀中頃に造営されたものであり，柱抜取り穴から出土する土器を参考にすると7世紀末前後に廃絶したようである。検出した遺構には重複がないから，建替えなどはおこなわれず，比較的短期間にその役割を終えたらしい。廃絶の事情は明らかでないが，敷石の目地間に残る炭化物の堆積をみると，本遺跡が罹災した可能性も考えられる。

本遺跡の性格は，SB001を中心にSB002～SB004という細長い建物を連ねる建物配置や，建物間に石敷面を有する点，あるいは瓦類が出土しない点など，宮殿跡としての色彩が濃い。とくに石敷面の存在は，伝飛鳥板蓋宮跡や宮滝遺跡の例と類似しており，遺跡の性格の一端を示すものではなかろうか。本遺跡を7世紀の中頃に造営された宮殿跡と考えると，当然文献にみえる「宮」との関連が問題になるが，現状では「飛鳥河辺行宮」をその有力な候補として指適するにとどめ，今後の検討にまちたい。

奥山久米寺西方の調査

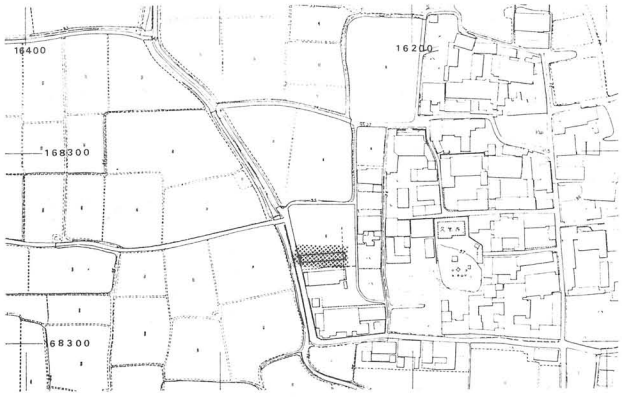
（狂心渠推定地）

（昭和51年8月～昭和51年9月）

この調査は，家屋新築に伴う事前調査である。調査地は奥山久米寺塔跡の西約60mで，旧寺域に接し，丘陵裾に沿って幅広い低地が南北に続くその東岸にあたる。この低地は，田村吉永氏が「狂心渠」と推定する地形の南延長部にあたる。調査は，東西約20m，南北約3.5mのトレンチを設定して実施した。

調査の結果，奈良時代以前に遡る南北大溝を検出し，溝の東岸を確認した。東岸の肩には護岸用の玉石が残る。溝は調査区内では完結せず，さらに西方に続くので，溝幅は20m以上になる。溝埋土である灰色礫・粗砂混合層中には，瓦・土師器・須恵器の破片と少量の弥生式土器が含まれている。いずれも非常に磨滅しており，水は地形からみて北流していたと推定できる。土師器・須恵器は古墳時代のものを一部含むが，その大部分は7世紀後半から奈良時代後半にかけてのものである。また，この南北溝を覆う灰色粘土層からは，瓦器・土師器・須恵器・瓦の破片が出土しており，古代末～中世頃にはこの溝が埋められたと推定できる。しかし，溝の開削年代は今回の調査では明らかにできなかった。

南北溝の東岸は，先述したように奥山久米寺の現塔心礎の西約60mにあたり，旧寺域の西限を画する位置に相当する。また，田村吉永氏が大官大寺の東側で「狂心渠」と推定した幅50m程の南北方向の落ち込みの南延長部にもあたっており，これと一体のものとなる可能性もある。これを契機に，今後の周辺地域の調査によって，これらの問題の解決をはかってゆきたい。



奥山久米寺周辺地形図（縮尺4000分の1）
（網目は南北溝）

小墾田宮推定地第３次の調査

（昭和51年９月～昭和51年10月）

この調査は，家屋新築に伴う事前調査として実施したものである。調査地は，当調査部が昭和45年以来２次にわたり，推定小墾田宮跡として発掘した第２次調査地の西南に隣接する場所である。家屋建設予定地に，東西5.5ｍ，南北６ｍの発掘区を設定し，一部南に拡張した。発掘面積は46㎡である。調査の結果，７世紀代と推定される溝３，土壙状の落ち込み１を検出した。これらは，いずれも第２次調査で検出した遺構に連続する部分である。（概報４参照）

調査地の層序は，床土下に暗黄褐色粘質土，暗灰褐色粘質土，茶褐色砂質土があり，遺構は茶褐色砂質土上面で検出した。この層の直下には，古墳時代の遺物を含む含礫粗砂層があり，かっては全体に流路であったと考えられる。

溝SD200は，南東から北西に向けて流れる幅3.8ｍ前後，深さ0.6ｍの素掘りの溝で，今回はその北岸を検出した。溝SD201は，溝SD200の北を平行に走る幅1.2ｍ，深さ0.3ｍの素掘りの溝であり，今回その西端を確認した。溝SD202は，ほぼ東西に走る幅２ｍ，深さ0.2ｍの素掘りの溝で，今回の調査地内では南岸が大きく南に拡がっている。溝内には人頭大の玉石が散乱して堆積していた。なお，溝SD201とSD202は重複し，前者の方が古い。以上の３条の溝は，いずれも７世紀代の遺構である。土壙状の落ち込みSK222は，前回の調査でその一部を確認していたものである。幅2.0ｍ，深さ0.2ｍ前後の溝状を呈し，発掘区外にのびる。あるいは，溝SD201と本来は１本の溝であった可能性もある。

今回の調査でも，この地域の南半には７～８世紀代の建物は存在せず，数条の溝が西流することを確認した。このことは，県道沿いの南半地区が推定山田道に何らかの関連を有する可能性が前回同様考えられる。しかし，今回も山田道の位置や造営時期について明らかにするような手懸りを得ることはできなかった。

軽池北遺跡の調査

（昭和51年5月～昭和51年6月）

この調査は，橿原市立畝傍東小学校の新設工事に先立って実施したものである。調査地は橿原神宮前駅の東南0.8㎞に位置し，「軽池」の北方にひろがる丘陵と水田の一部である。

調査の結果，丘陵上で奈良時代後半頃の掘立柱建物1，13世紀前半の竪穴住居3，弥生時代と古墳時代の土壙2，7世紀末の溝1等を検出した。掘立柱建物SB120は3間×2間の東西棟建物である。桁行の柱間は2.5㎡等間であるが，梁行は1.7～2㎡とばらつきをみせ，平面形もいびつである。柱穴から出土した瓦・土師器・須恵器から奈良時代後半の建物と考えられる。

竪穴住居3棟は，いずれも丘陵尾根で発見した。出土した瓦器の年代から13世紀前半のものと考えられる。竪穴住居SB105は東壁と北壁を残し，2×3.7㎡程の南北に長い長方形プランに復原できる。東と北に周溝を残し，柱穴が4隅にある。南端に多量の瓦器を含む貯蔵穴と思われる土壙SK103がある。竪穴住居SB110は東壁と北壁を残し，4.5×3㎡程の東西に長い長方形プランに復原できる。東と北に周溝を残し，柱穴が4隅にある。西端で検出した貯蔵穴と思われるSK107から多量の瓦器が出土した。竪穴住居SB115はSB110を壊してつくられている。東壁と北壁を残すが，平面形・面積とも明らかでない。周溝は東と北に残り，東北隅の柱穴を検出した。

溝SD140は幅7㎡以上，深さ1.1㎡を測る。自然地形による狭い谷，もしくは凹みとも考えられるが，全容を明らかにできなかった。最下層から7世紀末の土師器・須恵器が出土し，上層には瓦器片を含む。

竪穴住居SB105・110・115及び貯蔵穴と思われるSK103・107から出土した瓦器は，いずれも13世紀前半のものと考えられる。畿内で，この時期の竪穴住居の発見された例はきわめて少く，貴重な例といえよう。なお，詳細は『軽池北遺跡発掘調査報告』（軽池北遺跡調査会 1977年3月）を参照されたい。